

# 南田原条里遺跡第50次

—copeこうべ倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022年3月

福崎町教育委員会



## あ い さ つ

福崎町は古くから交通の要衝として栄え、周囲を豊かな山林に囲まれ、中央部を清流市川が流れおり、その東西それぞれに市街地が形成されてきました。

このたび作成した本報告書は、市川東岸に位置する南田原条里遺跡の発掘調査報告書です。当遺跡では近年の開発により調査数が増え、徐々に遺跡の状況が明らかになってきています。

このたび、(仮称)コープこうべ協同購入センター姫路新築工事に先立ち確認調査をしたところ、奈良時代を中心とした遺構の存在が分かったことから、遺構に影響を受ける箇所について本調査を行いました。その成果をまとめた本報告書の刊行のほか、広報への掲載や展示を行うことで地域のみなさまにとって郷土の歴史・文化への理解を深めていただけ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり生活協同組合コープこうべをはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

福崎町教育委員会

教育長 高橋 渉

令和4年3月

## 例 言

1. 本書は令和3年度に確認調査(第49次)、本発掘調査(第50次)を行った兵庫県神崎郡南田原字ナコザに所在する南田原条里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は生活協同組合コープこうべの依頼を受けて福崎町教育委員会が実施した。
3. 経費は確認調査については国庫補助金を充て、本発掘調査は生活協同組合コープこうべ負担により実施した。
4. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 福崎町教育委員会

事務局

教 育 長 高橋 渉

社会教育課長 松田 清彦

社会教育課副課長 森 公宏

社会教育課係長 藤原 元

社会教育課主査 長谷川幸子

社会教育課主事 梶口 碧

発掘調査・整理作業担当

埋蔵文化財専門員 渡辺 昇

整理作業員 梶 智美

整理作業員 福永 明子

整理作業員 原井川奈美

整理作業員 常陰ひとみ

5. 発掘調査は株式会社マツダ建設に委託して実施した。全体図・ドローン撮影も同社による。
6. 本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福崎町設定の基準点を使用している。
7. 本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図(1/10,000)を、調査区配置図は福崎町都市計画図(1/1,000)を編集したものである。一部大和ハウス工業株式会社作成の図も利用した。
8. 執筆編集は梶口・梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。
9. 柱根の樹種鑑定を森下大輔氏にお願いし、玉稿を賜った。感謝致します。
10. 本報告に係る図面、写真、遺物等は、福崎町教育委員会にて保管している。
11. 調査・整理作業において下記の方々にご助言・ご協力をいただいた。また、多くの方々や機関にご指導・ご協力をいただきました。感謝します。

生活協同組合コープこうべ・大和ハウス工業株式会社姫路支店・吉田区

# 本文目次

Iはじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 確認調査に至る経過と結果	1
3. 本発掘調査の経過	8
4. 位置と環境	8
II調査結果	
1. 調査の概要	13
2. 遺構	13
3. 遺物	25
III 南田原条里遺跡第50次調査検出の柱根樹種について	34
IV おわりに	36

# 図目次

図1 福崎町の位置	ii
図2 確認調査実測図(1)	2
図3 確認調査実測図(2)	4
図4 確認調査出土遺物実測図	6
図5 確認調査と本調査位置図	7
図6 南田原条里遺跡の位置と周辺の遺跡	9
図7 南田原条里遺跡調査箇所位置図	10
図8 第50次調査平面図	12
図9 遺構実測図(1) (SB01・SB02)	14
図10 遺構実測図(2) (SB03・SB04)	15
図11 遺構実測図(3) (SB05・SB06)	16
図12 遺構実測図(4) (SB07・SB08)	17
図13 遺構実測図(5) (SB09・SB10)	18
図14 遺構実測図(6) (1区・SA)	19
図15 遺構実測図(7) (東壁・SX)	22
図16 遺構実測図(8) (SK・SD)	24
図17 出土遺物実測図(1)	28
図18 出土遺物実測図(2)	29
図19 出土遺物実測図(3)	30
図20 南田原条里遺跡第40次・第50次 調査平面図	37



図1 福崎町の位置

# I はじめに

## 1. 調査に至る経緯

南田原条里遺跡は南田原に広がる遺跡で、地形図平面図や水路の状況から条里遺跡と考えられた遺跡で広範囲にわたる。平成10年度から開発に際し順次調査が実施され、現在54次の調査が行われている。

既往の調査では、第10次調査で弥生時代前期後半の溝と後期の溝が確認されている。弥生前期の溝は南側に集落があることを示し、環濠の可能性もある。後期の溝は北側から流れている。第10次の原因となった町道中島井ノ口線が南北に通ることによって、開発が進み調査件数が増加していった。第21次調査では弥生時代後期の東西に流れる溝を確認し、前期の土器も流入している。その後、町道中島井ノ口線沿い東側に大型商業施設の建設が続き、第23次調査で奈良時代のピット・溝が確認されている。第27次の個人住宅に伴う調査でも奈良時代の遺構が確認され、南田原条里遺跡北側に奈良時代の遺構が顕著に確認されるようになった。遺跡南東部では中世の遺物が出土することが通有であった。第23次調査区に北接する第40次では奈良時代の掘立柱建物や溝・落ち込みなどが検出され、方形掘り方の大形建物の存在を確認した。遺物の中には稜楓や製塩土器も含まれている。遺跡北端の第39次調査でも奈良時代の溝・土坑・ピットが確認されている。今回調査した地点は第40次と第39次の調査区の間に位置している。

## 2. 確認調査に至る経過と結果

令和3年5月10日に、工事施工者の大和ハウス工業株式会社姫路支店から、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建物建設に伴い予備調査依頼書が提出された。大規模開発になることから具体的な設計図・工事計画が確定していない。遺跡の有無・広がりと遺跡が存在した場合の調査量を早急に把握する必要が生じたことから、事前に確認調査を行った。令和3年5月24・25日に確認調査を行ったところ、開発予定地の西半で遺跡の存在が確認された。調査対象地に水田が11枚あり、当初12か所のグリッドを設定した。北西から1G・2Gとした。ただ6Gで落ち込みを確認したが、自然か人工か判断が付かないこと、遺構の広がりを確認するために南側に13Gを追加した。計13か所のグリッドを設定し調査を行った。

掘り下げは重機を使用し、平面・断面の観察等は人力によって精査し、写真撮影・図化作業を行った。埋め戻し作業も行った。

1Gは4層から成る。第1層は耕土、第2層は底土である明黄褐色シルト質極細砂、第3層は暗褐シルト質極細砂で上面にマンガンが堆積している。第3層は包含層、第4層は地山であるにぶい黄シルトである。第3層から須恵器・土師器が出土している。グリッド中央に北から南東に向かって弧状にめぐる溝とピットを検出した。溝は幅30cm前後で、ピットは径14cmを測る。埋土は黒褐シルト質極細砂である。

2Gは1Gと同じ水田の東側に設定した。層位は1Gと同じである。地山面でピットを1基確認している。遺物は土師器小片が出土している。

3Gは1Gの南側に設定した。層位は同じである。平面では遺構は検出できず、須恵器・土師器が出土している。北壁で浅い溝状遺構を確認した。幅60cm深さ8cmのもので第3層を埋土にしている。南側に延びておらず、埋土も異なることから自然地形と思われる。

4Gも層位は同じである。径20cmのピットを2基検出している。包含層から須恵器・土師器・製塩土器が出土している。

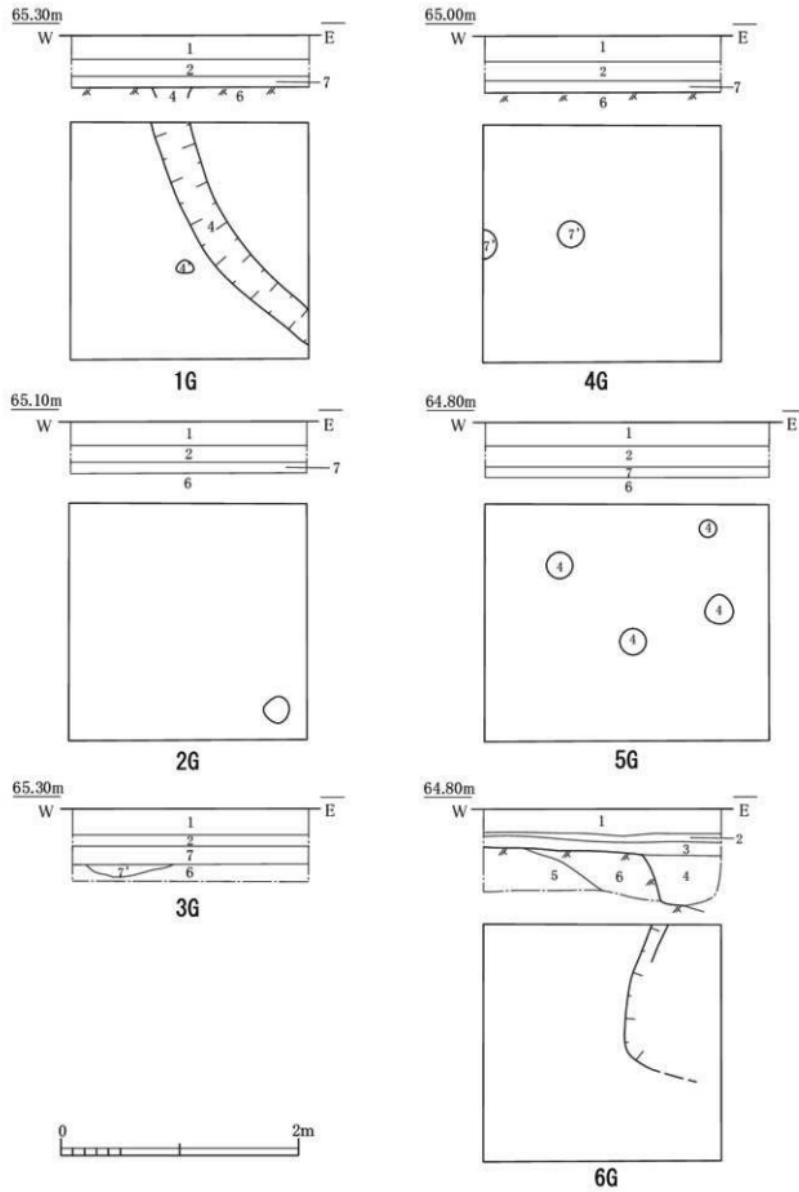


図2 確認調査実測図（1）



調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



1G北壁



1G機械掘削



2G北壁



3G（南から）



4G北壁



4G調査風景

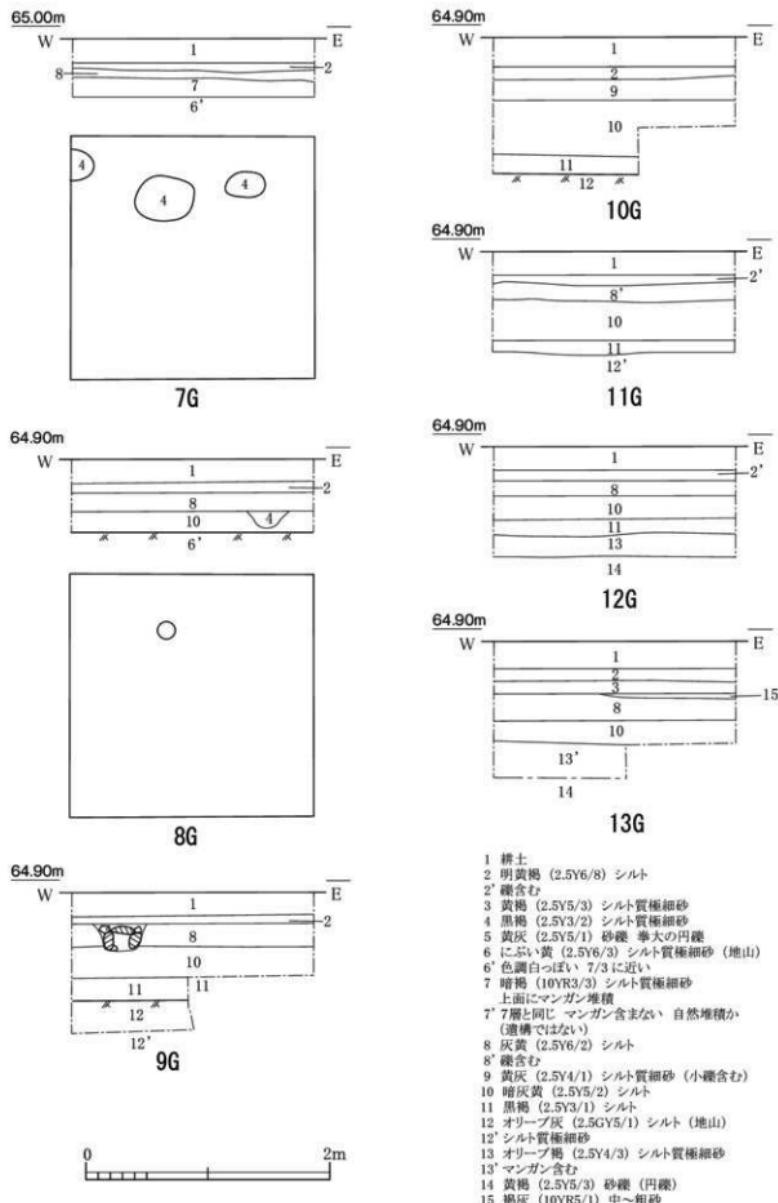


図3 確認調査実測図 (2)



5G 北壁



7G 北壁



8G 北壁



9G 断割り



10G 北壁



11G 北壁



13G 人力掘削



13G 北壁

5Gも層位は同じで、4基以上のピットを確認している。径15~25cmの大きさで差がある。第3層から須恵器・土師器が、耕土から陶磁器が出土している。

6Gは第3層の色調が異なっている。黄褐色シルト質極細砂である。遺物はこの層から磨滅した須恵器が1点出土している。落ち込みを確認している。ただ、西側は地山下層の疊層が上がっており、東に落ちる地形になっている。落ち込みは北から南に浅くなっていることから、谷地形の埋没過程ではないかと思われる。

7Gは今までのグリッドの層位に1層加わる。第2層と第3層の間に灰黃シルトが堆積している。遺物は包含層である暗褐色シルト質極細砂から須恵器・土師器が出土している。遺構は地山面でピットを3基確認した。1基は径50cmと大形である。

8Gは南側中央に設定したグリッドで堆積層が異なっている。1・2層は同じであるが、3層目が灰黃シルト、4層目が暗灰黃シルトと自然堆積の層である。近世染付磁器が1点出土しており、面で確認したピットも樹根かと思われる。

9Gは8Gの4層目の下に黒褐色シルトが加わり、地山面はさらに低くなっている。地山は同一層であろうが、グライ化して色調が変化してオリーブ灰シルトになっている。自然堆積と思われる。床土下で石組の暗渠を確認している。遺物は出土していない。

10Gは9Gとはほぼ同じ堆積であるが、地山面がさらに20cm低くなっている。自然堆積と思われ、遺構は確認していない。中世の土師器鍋と近世染付磁器が出土している。

11Gも9Gとはほぼ同じ堆積で地山の深さも変化ない。各層に疊が含まれる。遺構は検出されておらず、須恵器杯身が1点出土している。

12Gは南東部分に設定したグリッドで9Gの堆積と上層は同じであるが、地山であるオリーブ灰シルトが確認されていない。黒褐色シルトの下にオリーブ褐色シルト質極細砂、黄褐色砂疊が堆積している。砂疊層は洪水堆積層と思われる。遺物は須恵器・土師器と備前焼が出土している。

13Gは6Gの南側に追加設定したグリッドである。地山面は検出されず、12G同様の下層の洪水堆積層が確認された。遺物は出土していない。

調査の結果、対象地中央から西側にかけてのグリッドで遺構が確認され、遺跡の広がりが認められた。東側は洪水堆積層で安定した遺構面は認められなかった。東側グリッドでは中世の土器と古代の土器が共伴している。

出土遺物はコンテナ1箱と少ない。須恵器・土師器・陶磁器が出土しており、図化した点数は5点である。すべて須恵器で、1は杯蓋でつまみを欠いている。天井部は平坦で稜線を持たずに外傾する。端部は残存していない。2・3は杯底部である。ロクロナデで底面未調整である。3の方が底部安定し、シャープである。4・5は椀口縁部である。4は内湾し端部尖り、重ね焼きの痕跡見られる。5は外傾し端部丸い。

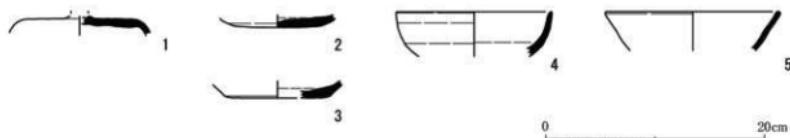
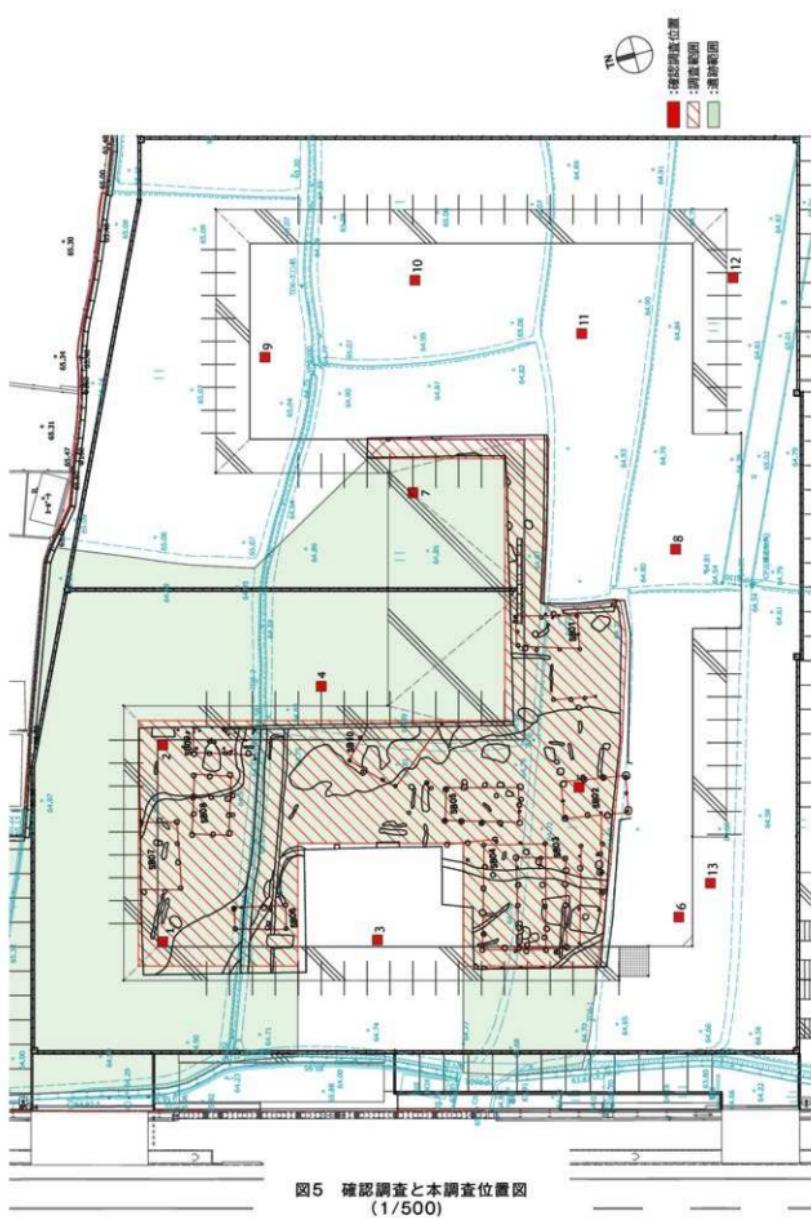


図4 確認調査出土遺物実測図



### 3. 本発掘調査の経過

確認調査結果を基に協議を行い、遺跡範囲内で掘削を受ける部分について本発掘調査範囲を確定した。平成3年9月3日付けで生活協同組合コープこうべから文化財保護法第93条の発掘届出書が提出され、11月8日から本発掘調査を実施した。

便宜的に東側建物部分と連結部を1区、西側建物部分を2区として調査を進めた。確認調査結果から耕土と上層の掘り下げは重機を用い、包含層と遺構面については人力により対応した。1区から着手し、1区全景写真を11月15日に撮影、引き続き2区に入った。南側から北側に向かって調査を進めていった。機械掘削に引き続いて人力掘削・面精査を行い遺構検出に努めた。隨時写真撮影・平断面図の記録を作成しつつ進捗した。2区全景写真は12月4日に撮影し、その後掘立柱建物の柱穴の断割り作業を行った。SB02は南側に延びていることから拡張し、SB04についても北側に延びる可能性があり確認するために一部拡張した。



確認調査出土遺物



調査風景

### 4. 位置と環境

福崎町は兵庫県のほぼ中央に位置しており、市川中流域に属している。市川は但馬南部の生野町に源を発し神崎郡を南流し、飾磨郡であった姫路市を通って瀬戸内海の播磨灘に注ぐ2級河川である。遺跡は市川東岸に位置し、地形区分上は高位氾濫原と低位氾濫原に位置づけられる。

南田原条里遺跡では今まで54回の調査が行われている。弥生時代の溝や旧河道、古代の掘立柱建物などが検出されており、遺物は旧石器時代のナイフ形石器から近世陶磁器まで長期間の遺物が出土している。隣接する南側第40次調査区では奈良時代の大形建物や落ち込み・土坑が検出され、官衙的性格の強い遺物が出土している。北側の第49次調査区でも奈良時代の遺構遺物が確認されている。南田原条里遺跡北側には中世田原莊関連の南田原桶川遺跡があり、その北側には西田原堂ノ前遺跡が存在する。南田原桶川遺跡では中世の墨書き土器や旧石器時代のナイフ形石器も出土している。

北東方向には明確な遺構は確認されていないが、弥生時代から中世の遺物が出土している西田原辻ノ前遺跡が、その東側には西田原前田遺跡が、その東には西田原下野田遺跡、その北には西田原上野田遺跡が位置しており主に中世の遺物が採集されている。西田原上野田遺跡は2回本調査が行われており、弥生時代末の流路から土器がまとまって出土している。奈良時代から中世にかけての掘立柱建物などの遺構も検出されている。西田原上野田遺跡の北西には新たに確認された中世の遺跡である田尻宮ノ前遺跡と近世にまで続く田尻宮ノ西遺跡がある。さらに北側の辻川山周辺には弥生時代中期の土

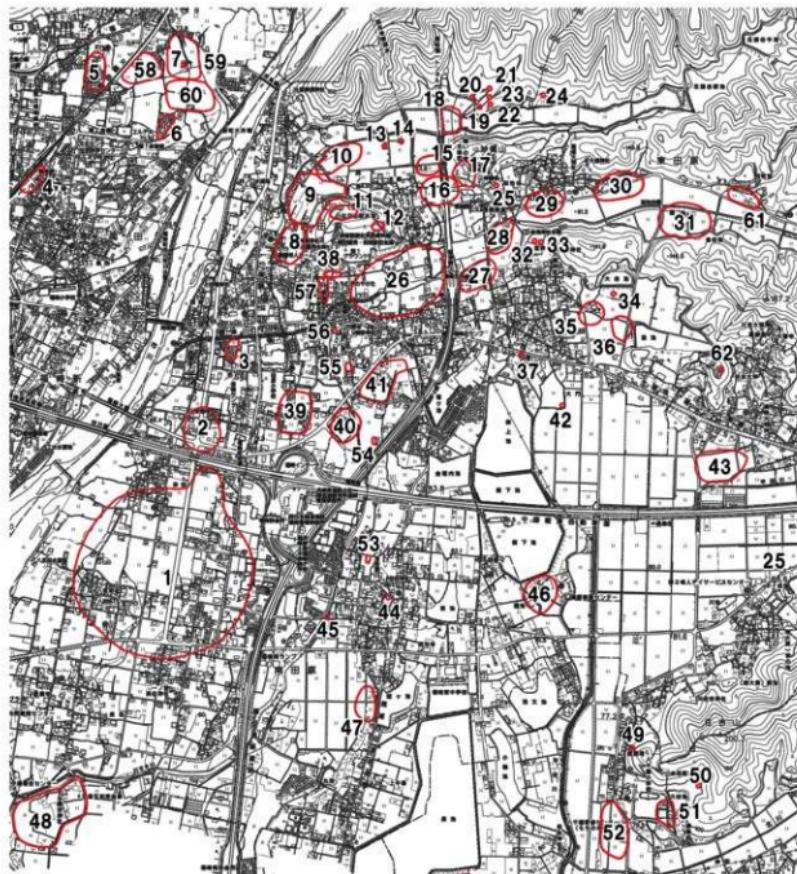
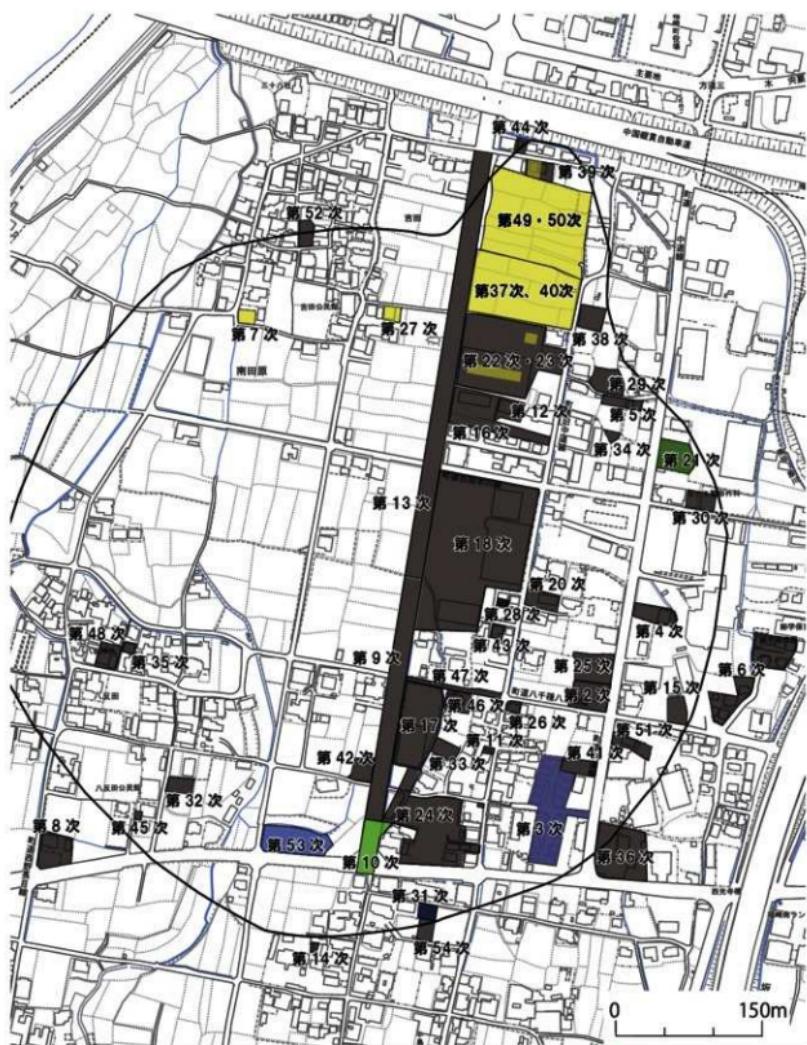


図6 南田原条里遺跡の位置と周辺の遺跡

1 南田原条里遺跡	17 妙徳山遺跡	33 ピワクビ2号墳	49 住吉山古墳
2 南田原桶川遺跡	18 西田原穴田遺跡	34 大谷前古墳	50 大谷古墳
3 西田原塚ノ前遺跡	19 大畑1号墳	35 大門遺跡池田地区	51 八千種余田大谷遺跡
4 中溝遺跡	20 大畑2号墳	36 大門遺跡皿ノ下地区	52 八千種庄春日遺跡
5 清水遺跡	21 大畑3号墳	37 大門池ノ下古墳	53 西光寺西ノ垣内遺跡
6 福田東田黒遺跡	22 大畑4号墳	38 上坂遺跡	54 西田原下野田遺跡
7 大塚古墳	23 池ノ谷中池遺跡	39 西田原辻ノ前遺跡	55 田尻宮ノ前遺跡
8 下大明寺遺跡	24 尾森古墳	40 西田原前田遺跡	56 田尻宮ノ西遺跡
9 上大明寺遺跡	25 妙徳山古墳	41 西田原上野田遺跡	57 三木家住宅関連遺跡
10 西広畠遺跡	26 北野散布地	42 桜池東散布地	58 山崎大塚内遺跡
11 西広岡遺跡	27 大門岡ノ下遺跡	43 西大貫遺跡	59 山崎五反田遺跡
12 北広岡遺跡	28 加治谷藪下五反畑遺跡	44 西光寺中遺跡	60 山崎五反田遺跡
13 東広畠古墳	29 加治谷前田遺跡	45 西光寺遺跡	61 加治谷垣ノ内遺跡
14 東新田古墳	30 加治谷越前遺跡	46 櫻田遺跡	62 相山古墳
15 北野寺山西遺跡	31 加治谷大垣内遺跡	47 南田原中野田遺跡	
16 北野寺西遺跡	32 ピワクビ1号墳	48 南田原長目遺跡	



■ = 弥生時代  
■ = 奈良・平安時代  
■ = 中世  
■ = 調査区(構造無し)

図7 南田原条里遺跡調査箇所位置図

器棺やガラス小玉を出土した上大明寺遺跡や円形周溝墓を検出した北野寺西遺跡などの弥生時代遺跡と東広畑古墳・東新田古墳の横穴式石室を主体部とする後期古墳が展開している。辻川山の南側から南東部分には弥生時代中期から中世の複合遺跡である北野散布地がある。その北東に細長く延びる加治谷には加治谷藪下五反畑遺跡・加治谷越前遺跡・加治谷前田遺跡などの遺跡が谷沿いに存在している。加治谷入口北側には正暦2年慶芳上人開基と言われる神積寺が広がっており、丘陵上には妙徳山遺跡箱式石棺が、南側には県下でも最大級の横穴式石室を主体部とする径30mの円墳である妙徳山古墳が南側に開口部を向いている。石造物も豊富で特に慶芳上人の墓と伝えられる五重層塔は鎌倉前期から中期のかけての変化を示す資料である。神積寺北側にも北東方向に細長く延びる谷入口北側には4基から成る大畑古墳群がある。横穴式石室を主体部とする円墳で構成されており、隣接して須恵器窯跡の可能性が高い池ノ谷中池遺跡が存在する。

南田原条里遺跡の東側は段丘崖があり段丘面になり高くなっている。西光寺野と呼ばれる丘陵部で徐々に高くなっている。明瞭な遺構は確認されていないが、注目される遺物は知られている。縄文時代草創期の有舌尖頭器が西光寺遺跡から採集され、桜下池西遺跡からはナイフ形石器が出土している。宝性院境内には高室石製の家形石棺蓋が置かれている。繩掛突起を持つ石棺である。境内にはそれ以外にも2点の小形石棺が保存されている。

南側には弥生時代の環濠集落である南田原長目遺跡が存在する。南西方向には勅使寺経塚があり、姫路市になる旧神崎郡域には播磨国風土記の遺称地である梗岡・冴岡が認められ、弥生時代中期後半の方形周溝墓を検出した八幡遺跡などがあり、南端には終末期の大形古墳である権現山古墳が立地している。



西田原上野田遺跡、旧河道・土坑



妙徳山古墳

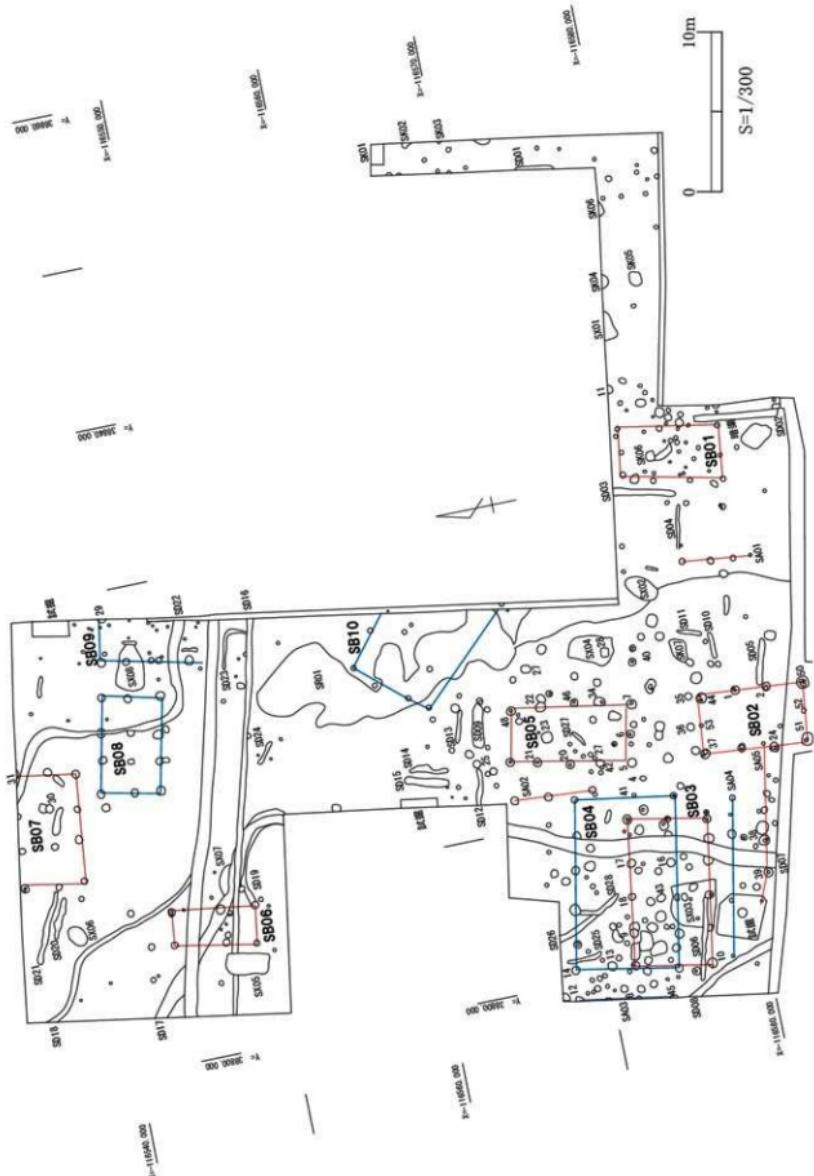


図8 第50次調査平面図

## II 調査結果

### 1. 調査の概要

調査は基本的に1面で行った。大半は奈良時代の遺構であるが後世の遺構も含まれる。基本層序は第1層耕土、第2層床土である灰黄シルト質極細砂、第3層黄灰シルト質極細砂、第4層黄褐シルト質極細砂、第5層地山である明黄褐シルト質極細砂である。第4層上面が遺構面である。検出した遺構は掘立柱建物・柵・溝・落ち込み・土坑・ピットである。調査面積は1240m<sup>2</sup>である。調査範囲が東西に長いことから遺構面を保全する目的から、便宜的に東側建物部分と連結部を1区とし、西側建物部分を2区として調査を行った。全景写真や遺構面の保護など広域になると大変なので調査区を分割して調査した。ドローン撮影も2回行った。

### 2. 遺構

#### 掘立柱建物(SB)

**SB01** 1区中央で検出した東西2間の3.2m、南北3間6.4mの側柱建物である。主軸方向はN12°Eである。

**SB02** 2区南側で検出した東西2間、南北3間の側柱建物である。ほぼ南北の正方位に主軸を持ち、東西3.8m、南北6.3mを測る。南北辺中央の柱穴が他より小さいのが特徴である。また、この2柱穴だけ石材を伴っていない。東西辺の8柱穴は全て石材を伴っている。柱抜き取り後に移動しているが、柱を据えるための石材と思われる。柱穴の径は棟行中央の2つを除いて0.6~0.95mを測る大きさで、平面形は円形や隅円形・不定形で統一はされていない。深さは0.4m前後である。SB02は検出面にすべて石材が見られ、上部から遺構が掘り込まれていたことは確実である。南辺の両側の柱穴が大きく深く掘られており、最大長0.95m、深さ0.55mを測る。柱穴下部では柱痕跡が認められ、径0.2~0.25mを測る。立てられた石材と掘り方の間も0.25mでその大きさの柱であろう。棟行中央の柱穴は円形で径0.35m、深さ0.25mで柱痕跡は確認していない。SB02柱穴からの遺物は他建物より多い。

**SB03** 2区南西部に位置する南北2間、東西4間の側柱建物である。東西棟で主軸方向はN12°Eである。東西8.8m、南北4.8mを測る。棟行の中央の柱穴が1回り小さい。3基の柱穴(P2-3-11)に柱根が残存していた。残存していた最大幅は13cm、長さ35cmであった。1点がスギ、2点がヒノキと同定されている。

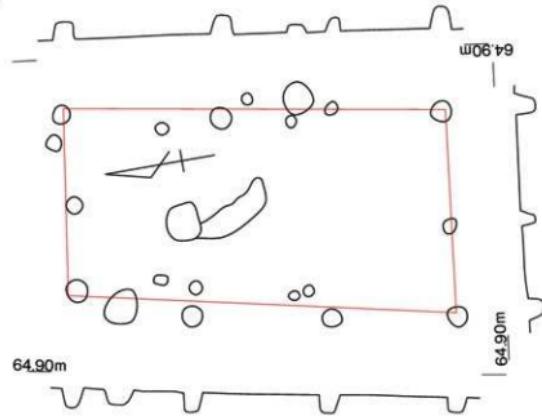
**SB04** 2区南西部に位置し、SB03と切り合い関係のある東西棟である。東西5間で11m、南北3間で6mを測る。1つの柱穴に柱根が残存していた。主軸方向もSB03と同じN12°Eである。西辺中央は明確ではないが、東辺中央は柱穴が小さく、棟行中央柱穴が小さい共通点を有する。北側に延びる可能性があつたので、北側を拡張したが確認されなかった。3間×5間の東西棟である。

**SB05** 2区中央南側に位置し、主軸方向はSB03-04と同じN12°Eである。北辺中央は柱穴を検出していないが、東西2間、南北4間の南北棟である。東西4.6m、南北6.4mを測る。SB03-SB04のいずれかと併存したものと思われる。すべて主軸方位が同じである。一般的には辺を揃えたSB03の方が可能性は高い。3.2m離れ、南辺とSB03の北辺が直線になっている。SB04とは2m離れている。SB04の南から1間目とSB05の南辺が通っていることから、SB04と同時併存した可能性も残される。

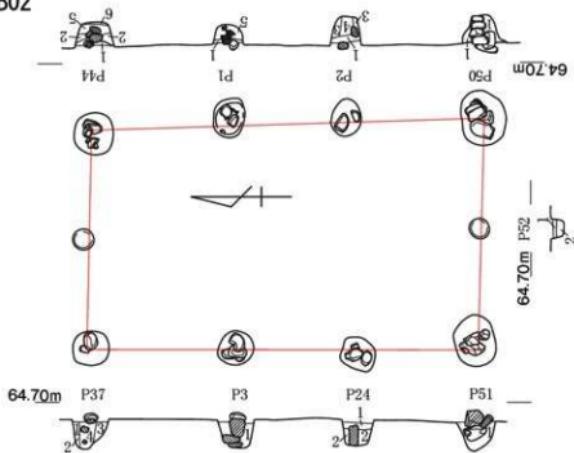
**SB06** 2区北西に位置する南北棟である。現代の溝で切られているが、東西1間、南北3間であろうか。東西2.4m、南北5.2mを測る。主軸方向はSB03などと同じN12°Eである。

**SB07** 2区北端で検出した南北2間、東西3間の東西棟である。調査区北壁沿いに位置しているが、西辺延長上で柱穴は確認されなかつた。南北3.6m、東西6.9mを測る。桁行中央にも柱穴が並ぶがやや角

SB01



SB02

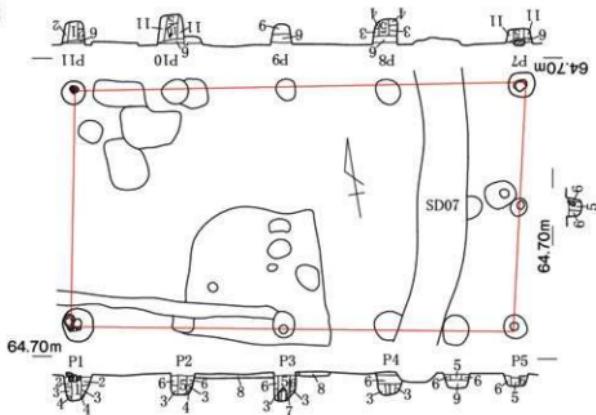


- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質極細砂
- 2 にじみ黄褐色 (10YR5/3) シルト質極細砂
- 3 にじみ黄褐色 (10YR5/4) シルト質極細砂 (マンガン多く含む)
- 4 褐色 (10YR4/4) シルト質極細砂
- 5 褐灰 (10YR4/1) シルト質極細砂
- 6 棕灰 (10YR6/1) シルト



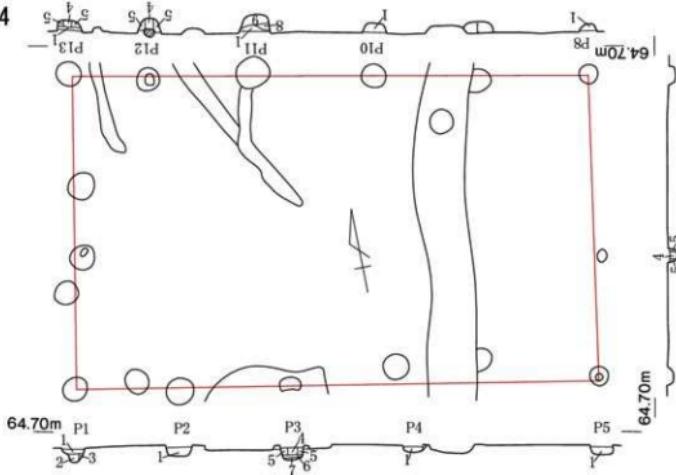
図9 遺構実測図(1)

SB03



- 1 灰黄褐 (10YR4/2) シルト質極細砂
- 2 灰黄褐 (10YR5/3) シルト質極細砂 (マンガン含む)
- 3 灰黄褐 (10YR5/2) シルト質極細砂 (明黄褐 (10YR6/6) シルトブロック入る)
- 4 にぶい黄褐 (10YR6/4) 細砂
- 5 にぶい黄褐 (10YR6/3) シルト質極細砂 (マンガン含む)
- 6 にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト質極細砂 (マンガン含む)
- 7 暗灰 (10YR5/1) シルト
- 8 にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト質極細砂 (マンガン含む・SX08埋土)
- 9 にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト質極細砂 (マンガン含む)
- 10 褐 (10YR4/4) シルト質極細砂
- 11 暗褐 (10YR3/4) シルト質極細砂 (明黄褐 (10YR6/6) シルト含む)

SB04



- 1 灰黄褐 (10YR4/2) シルト質極細砂 (マンガン含む)
- 2 にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト質極細砂
- 3 にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 4 にぶい黄褐 (10YR6/6) シルト質極細砂 (明黄褐 (10YR6/6) シルトブロックで入る)
- 5 にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト質極細砂 (明黄褐 (10YR6/6) シルトブロックで入る)
- 6 暗灰 (10YR4/1) シルト質極細砂
- 7 黒褐 (10YR3/2) シルト
- 8 暗褐 (10YR5/1) シルト質極細砂 (マンガン含む)
- 9 黑褐 (10YR3/1) シルト質極細砂 (8層ブロックで入る)



図 10 遺構実測図 (2)

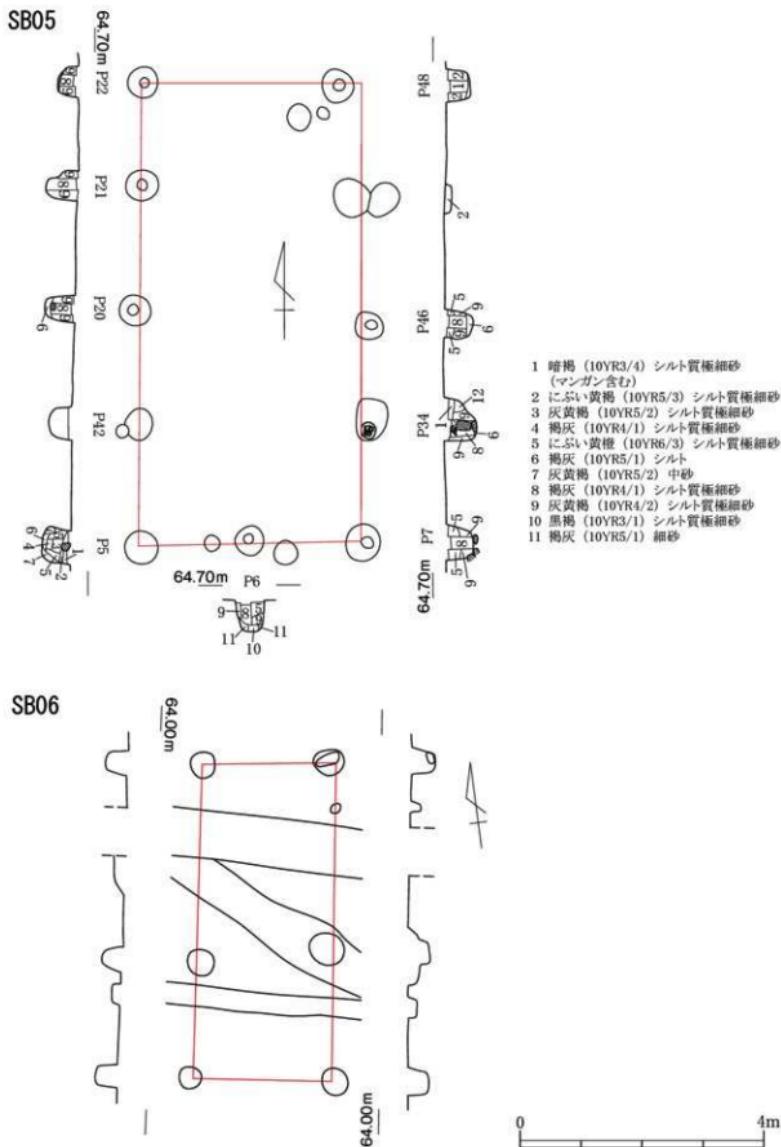
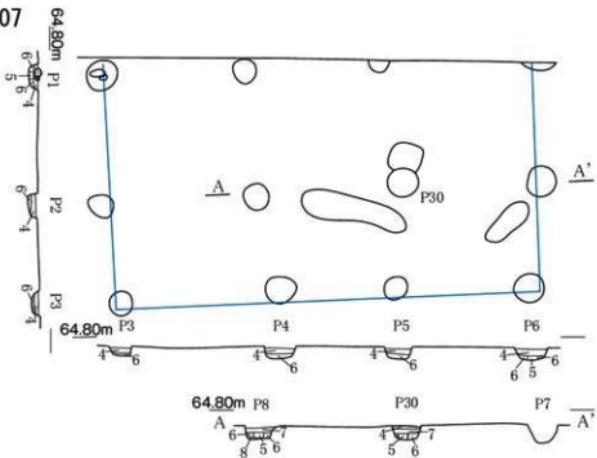
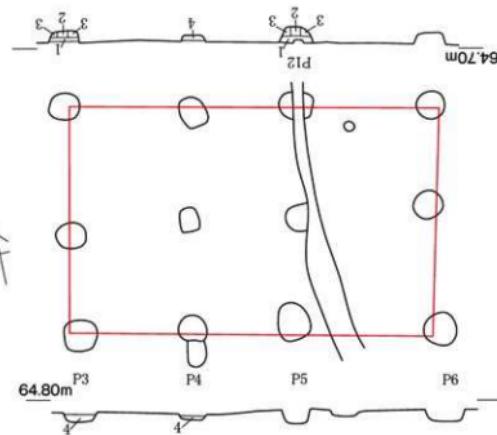


図 11 遺構実測図 (3)

SB07



SB08

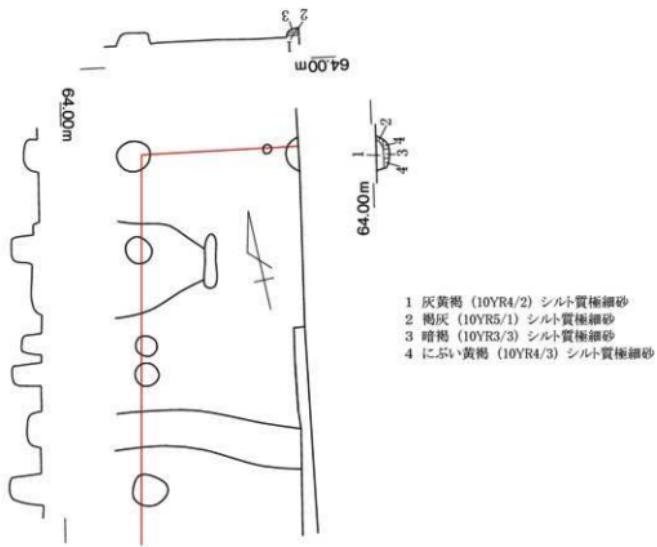


- 1 灰黄褐 (10YR4/2) シルト質極細砂
- 2 にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト質極細砂
- 3 褐 (10YR4/4) シルト質極細砂
- 4 にぶい黄褐 (10YR5/4)
- 5 灰黄褐 (10YR5/2) シルト質極細砂
- 6 にぶい黄褐 (10YR5/3) 極細砂
- 7 褐灰 (10YR5/1) シルト質極細砂
- 8 灰灰 (10YR5/1) シルト



図 12 遺構実測図 (4)

SB09



SB10

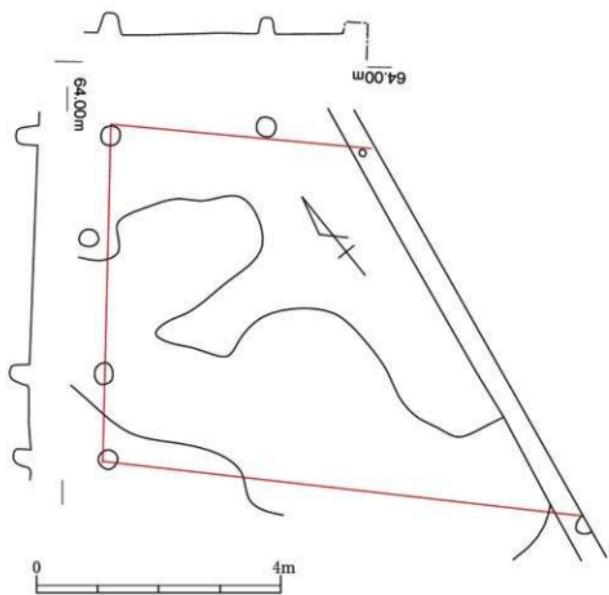


図 13 遺構実測図 (5)

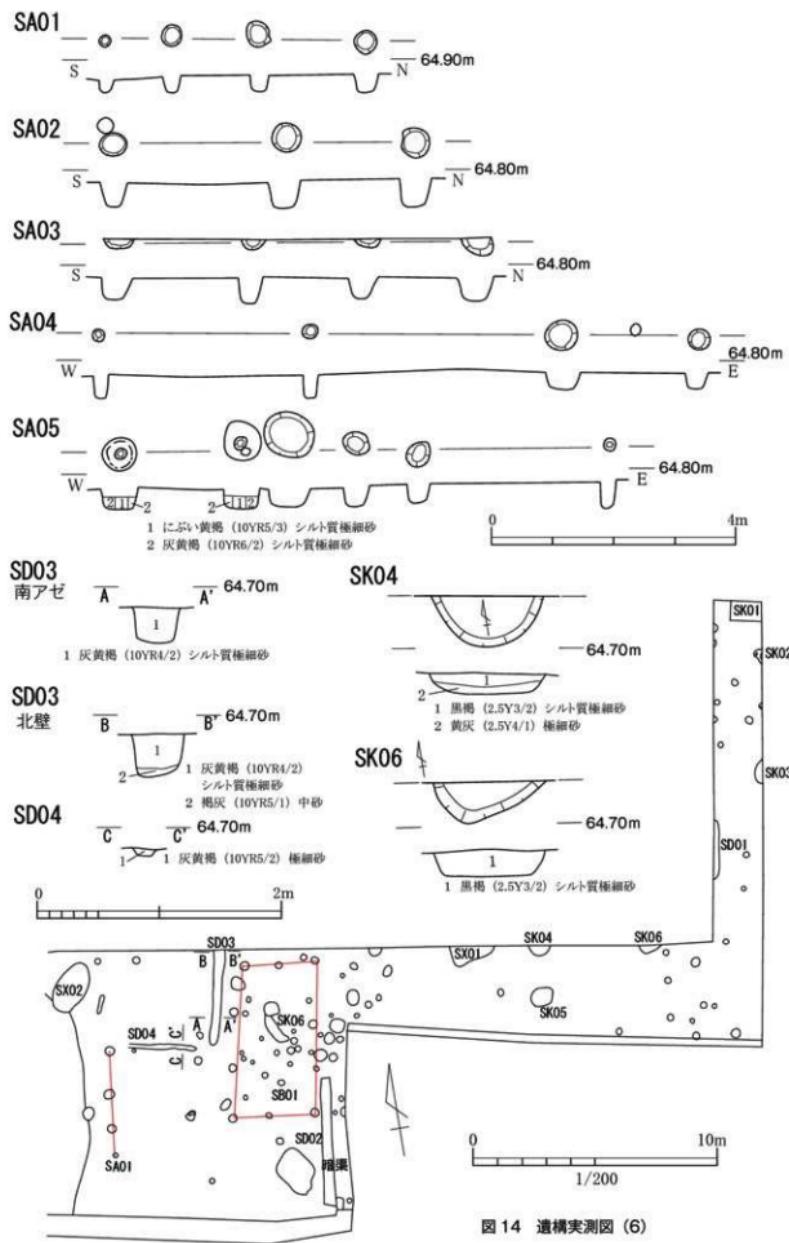


図 14 遺構実測図 (6)

度を変えているが、総柱建物の可能性もある。

**SB08** 2区北側で、SB07の南東部に位置している。南北2間、東西3間の総柱建物である。主軸方向はN10°Eと多くの建物とわずかに主軸方向を変えている。南北3.6m、東西6.0mを測る。

**SB09** 2区北側東壁沿いに位置し、東側調査区外に延びている。南北5.6mの3間で、東西2.6m1間以上の側柱建物である。SB08の北辺と直線に位置しており、主軸方向も同じことから同時期と思われる。SB08が東西棟でSB09は南北棟であろう。

**SB10** 2区中央に位置し、東側調査区外へ延びている。主軸方向はN45°Eと他と大きく方位を変えている。調査区内に洪水堆積層があり、その上に柱穴があることと柱穴の径が小さく柱間がやや広いことからも新しい時期の建物と思われる。西辺3間の6.0mで南東方向に3間の8.5m以上の側柱建物である。

#### 柵(SA)

**SA01** 1区西側に位置する。南北3間4.2mを測る。主軸方向はN4°Eである。

**SA02** 2区南西部に位置する。西壁沿いで検出した南北に延びる4間5.6mを測る。SB05から西へ1.5mと近接しているが、主軸方向はN4°Eと南北に近くSB02と近く、SA01とともに同じ時期の柵と思われる。

**SA03** 2区中央西壁沿いで確認した南北3間4.6mを測る。主軸方向はN12°Eで、SB03などと同じである。西側に延びないことを確認している。位置的にSB04に伴う柵であろう。

**SA04** 2区南西部にあり、SB04の南側延長部に位置している。主軸方向も同じである。東西3間10.0mを測る。柱間は同一ではなく、柱穴心々間距離に変化がある。

**SA05** 2区南西部のSA04の南側にあり、主軸方向も同じで、北側にあるSB03などの掘立柱建物とも同じである。東西方向で、4間8.0mを測る。南北に流れる溝SD07の両側の柱穴は大きく深い。柱痕跡も大きく、溝をまたいでいるので門のような機能を有していたのではないかと思われる。西側にあと1間角度をえて2.0m延びる可能性がある。

#### 溝(SD)

**SD01** 1区南北部分西壁沿いで検出した。南北2.7m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。断面形状はレンズ状である。

**SD02** 1区東西部分で検出した南北溝である。円礫を詰めた暗渠である。床土を切っていないので、現代ではない。胴木を伴わないタイプで底に2列の大形の石材を並べ、蓋となる石材を並べその上に拳大～指頭大の円礫を詰めている。南北5.5m、幅0.5～0.6mで深さ0.4～0.5mを測る。南北とも延びず、近接して同様な暗渠や関連遺構は確認されていない。主軸方向はN6°Eである。

**SD03** 1区東西部分中央に位置し、北側調査区外へ延びている。N6°Eに近い主軸方向を探り、幅0.45～0.6m、深さ0.35mを測る。検出長は4.0mで、埋土は深い部分には褐灰中砂が溜まり、全体には灰黄褐シルト質極細砂が堆積している。

**SD04** 1区東西部分中央にある東西溝である。幅0.15～0.2m、深さ0.1m前後の断面逆台形を呈する。埋土は灰黄褐シルト質極細砂である。長さ3.0mを調査したが、断続的に浅く西に続いているように見える。鋤溝の可能性もある。

**SD05** 2区南東部に位置する東西溝である。幅0.3mと細い溝で東西3.0mを測る。

**SD06** 2区南西部に位置する東西溝である。SB03の柱穴を切っていることから、SB03より新しいが主軸方向は同じである。幅0.2～0.3mの細い溝で東西に長さ5.2m直線に延びている。

**SD07** 2区南西部に位置し、調査区を南北に貫いている。幅0.9～1.2mの溝で部分的に緩やかに曲がるが全体的には南北に延びている。調査区内外に延び、北側のSD17と同一の溝になる可能性が高いと思われる。建物の柱穴を切っていることから、建物以降の溝であるが、SA05は溝を跨ぐ両側の柱穴が大

きいことから同時期かもしれない。主軸方向が多くの遺構とほぼ近いことから、意図的に構築された溝かもしれない。

**SD08** 2区南西部にあり、調査区北西から南東部に貫流している。直線的だが、僅かに東側に膨らんでいる。長さ6.5mを測る幅は0.5~0.8mで深さは最大で0.4mを測る。埋土は3層で底に灰黄褐細砂が、中層にぶい黄褐シルト質極細砂が、上に灰黄褐シルト質極細砂がレンズ状に堆積している。中層には地山ブロックが混じっていた。

**SD09** 2区中央で東西方向の溝で、幅0.8m、長さ2.8mを測る。深さは0.15mと浅い。直線的で端部は丸くなっている。延長上有SD12があるが、形状・規模が異なるので別遺構と思われる。

**SD10** 2区南東部にある東西方向の溝である。長さ1.8m、幅0.2m、深さ0.1mである。

**SD11** 2区南東部にありSD10の北側に直交に近い状況にある南北溝である。長さ1.5m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。

**SD12** 2区中央にある東西方向の溝で、調査区西側へ延びている。長さ2.6m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。全体的には直線に延びるが、部分的に緩やかに屈曲している。

**SD13** 2区中央でSD09の北側に位置する。長さ2.2m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。SD09と平行ではなく西側の方へ開いていく。

**SD14** 2区中央西側にある南北溝である。長さ2.5m、深さ0.1mを測る。北側が広く幅0.4mになり、中央付近から南が0.2mと狭くなっている。歪である。

**SD15** 2区中央西側にあり、SD14の西側に平行して存在する南北溝である。長さ2.8m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。主軸方向は建物などと同じN12°Eである。

**SD16** 2区北側にあり調査区を東西に貫いている。北側に現在の水路が平行しており、前代の水路と思われる。直線に延び、幅0.3m、深さ0.15mで、調査した長さは25mである。断面逆台形で底面は平たく、埋土は灰黄シルト質極細砂である。

**SD17** 2区北側に位置し、北西部調査区外から中央に流れ南側調査区外へ延びている。南側のSD07に繋がる可能性が高い。現代水路とSD16に切られ、SD19を切っている。幅0.5~1.0mで、深さ0.15~0.25mである。北西から南東に直線的に13m延び、角度を変えて南へ2m続き調査区外へ延びる。

**SD18** 2区北側にあり、調査区北西から蛇行しつつ南東に延びる。南側に行くほど浅くなり不明瞭になる。SD24も同一の溝と思われる。現状では現代水路で切られ、その南は明確ではない。幅0.2~0.4mで深さは0.15mである。北西から蛇行して延長13mで現代水路に切られた付近で肩部を残さなくなる。自然の溝でSD24を経て南東部へ流れていると思われる。

**SD19** 2区北側にあり、SD17に切られた弧状の短い溝である。幅0.25m、深さ0.15mでSD17に切られる1.8mを調査した。

**SD20** 2区北西部にあり、長さ2.7m、幅0.2~0.5mの直線に延びる溝である。SB07の西辺手前で北側に平行にSD21が存在する。深さは0.1~0.15mと浅い。

**SD21** 2区北西部でSD20と平行している。緩やかに蛇行しているが、全体的には直線である。長さ4.6m、幅0.4~0.6m、深さ0.15mを測る。

**SD22** 2区北側に位置し、調査区北側から南東部へ大きく蛇行して東側調査区外へ延びている。2ヶ所隅は丸いがケランクして延びている。建物を切っており、廃絶後の溝である。屈曲しているが延長19mで幅0.3~0.8m、深さ0.15~0.3mを測る。

**SD23** 2区北側に位置し、SD16に南側を切られている。SD16南側では検出されていない。幅0.25~0.4m、深さ0.15~0.3mを測る。長さは東西2.5m、南北1.4mである。断面形状はU字形を呈する。

## 1区南北部分東壁

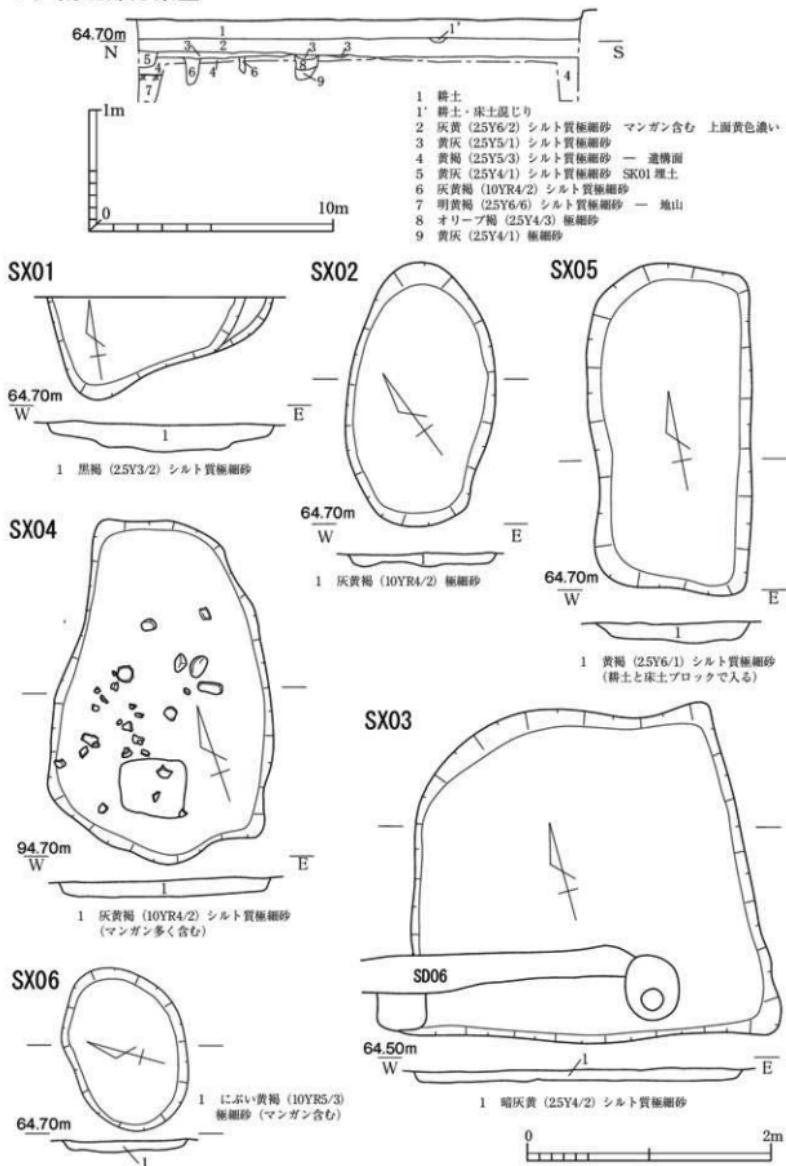


図 15 遺構実測図 (7)

- SD24 2区北側に位置する東西方向の短い溝である。幅0.15m、長さ1.6m、深さ0.15mを測る。
- SD25 2区南側北西隅に位置する南北方向の溝である。南北2.4mの長さで、幅0.3m、深さ0.15mを測る。
- SD26 2区南側北西隅のSD25の東側に位置している。北西から南東に流れSD28に切られている。幅0.4~0.6mで長さ3.1mを測る。断面はU字形で0.15mと浅い。
- SD27 2区中央南側にある長さ1.0mの短い溝で、最大幅0.2m、深さ0.2mである。
- SD28 2区南側北西にあり、SD26を切っている。SB04柱穴P15に切られている。P15から南に1.6m延び、南東方向に屈曲してSD26と同じ主軸を探り2.1m延びている。幅は0.4~0.6mで、深さは0.2mである。落ち込み(SX)
- SX01 1区東西部分北壁沿いにある落ち込みで、調査区外へ延びている。不定方形で、検出長は東西2.4m、南北1.0mを測る。深さ0.2m前後である。
- SX02 1区東西部分北西で2区に接した部分に位置している。東西1.2m、南北2.5mの小判形を呈した落ち込みで、深さ0.1~0.2mを測り、底面は平坦でない。埋土は灰黄褐色細砂であるが上面には円礫が多く置かれていた。
- SX03 2区南側西半に位置する不定方形の落ち込みで、SB03やSD06に切られている。南辺と東辺は直線であるが、北西部は弧を描いている。東西3.1m、南北2.8mで、深さは0.1mと浅い。底面は平坦で暗灰黄シルト質極細砂を埋土とする。
- SX04 2区中央南に位置する。不定形の落ち込みで、比較的多くの遺物が出土している。北辺0.7m、南辺1.8m、南北2.75mを測る不定台形の平面プランをしている。深さ0.15mで底は平坦である。底面でピット(P28)を検出しており、ピットの後に落ち込みが築かれている。
- SX05 2区北側南西部に位置している。南北2.7m、東西1.4mの長方形プランで、深さ0.15~0.25mを測る。底面は平坦でなく凹凸がある。SD16を切っていることから新しい時期である。
- SX06 2区北側北西部にある楕円形の落ち込みである。短径1.0m、長径1.5m、深さ0.15mを測る。
- SX07 2区北側中央近くにあり、SD16・17に切られている。最大長1.4mの円形で、深さ0.15mである。シルト質の埋土で溝のオーバーフローした部分の可能性も高い。
- SX08 2区北側東で検出した不定形の落ち込みである。SB09の柱穴以前の遺構で切り合い関係がある。平面形はフラスコ状で、西辺は1.8mで弧を呈している。東は0.8mで東西に3.0mを測る。深さは0.1mと浅い。
- 土坑(SK)
- SK01 1区南北部分北東隅で検出した土坑であるが、側溝断面で確認したため平面プランは明確でない。南北0.2m以上、東西0.75m以上の方形で調査区外へ延びている。深さは0.25mを測り、底面は平坦である。
- SK02 1区南北部分東壁で検出した。南北0.5mで東西0.4m以上である。深さは0.2mで断面は丸い。
- SK03 1区南北部分東壁沿いで検出した。南北0.9mで東西0.4m以上、深さ0.3mを測る。
- SK04 1区東西部分北壁沿いで検出した。東西0.9mの円形で、深さ0.2mを測る。
- SK05 1区東西部分中央で検出した不定方形の土坑である。SK04の南側に位置し、南北0.6m、東西0.9m、深さ0.15mを測る。
- SK06 1区東西部分北壁沿いで検出した。東西0.9mを測り北側へ延びている。深さ0.15mを測る。
- SK07 2区中央のSB02北東部で確認した不定形の土坑である。
- 旧河道(SR01)

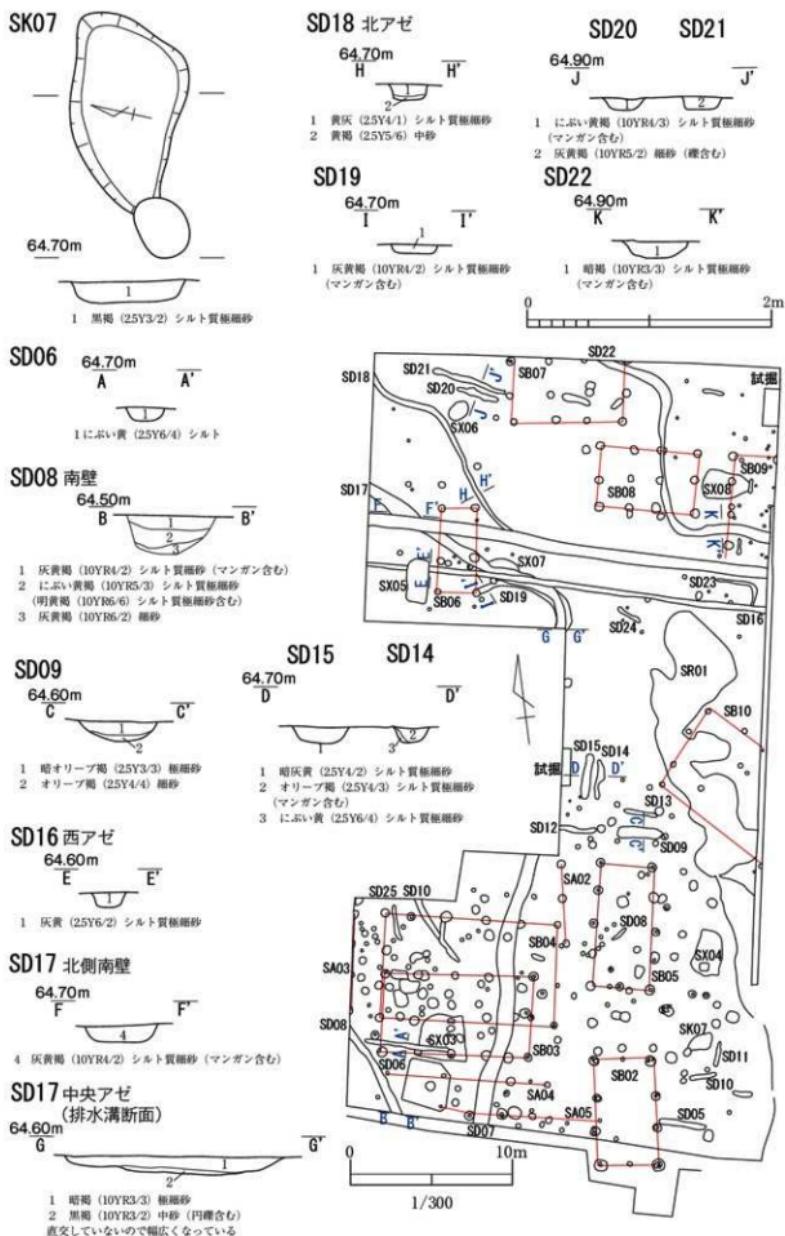


図 16 遺構実測図 (8)

調査区北西部分から南方に向かって流れている。顕著なのは2区中央から南側である。最大幅4.5mである。上に遺構が少數ながら認められることから、奈良時代前の旧河道である。円礫層と中砂層が堆積している。さらに下にも礫層が存在し、複数の洪水堆積が考えられる。深さは確認していない。

### 3. 遺物

出土遺物はコンテナ10箱で多いとは言えない。主な遺構が掘立柱建物であることもあるが、遺構出土の遺物が少ない。出土したものは弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・土錐・石匙・鉄釘である。

#### SB02出土土器(1~7・F1)

1~5は須恵器で1~4は杯である。1は平底から内湾する体部で端部尖りぎみである。重ね焼きの痕跡が見られ、その下から底部にかけて火摺が見られる、底面に刺突6か所認められる。何のためのものかわからない。2は平底から外傾し端部丸い。底面と体部との稜線は鋭い。底面未調整。3は径が大きく浅い杯で外傾する体部で端部尖る。底部稜線周辺はヘラケズリがなされている。色調は淡く砂粒を含む。ヘラ記号が認められる。4は不安定な平底である。蓋かもしれない。5は長頸壺で口縁部を欠く。体部は外傾し稜線を有して内傾する肩部に統く。底部は内湾ぎみの高台で端部角張るが下端につまみ出している。肩部と内面には自然釉が付着している。SB05の柱穴出土と接合したことは注目される。6・7は土師器で6は皿である。見込みに中心線と刻畫されている。文字か記号か明確でない。大きめの皿で少し外反ぎみに伸びる体部で端部丸い。底面は丁寧に仕上げられ部分的にミガキも見られる。7は甕口縁部で内湾ぎみに開いている。端部は内側に向かって尖り気味に丸く納めている。内外面ともハケ整形でチャートなどの砂粒多く含んでいる。F1はSB02北西隅の柱穴P37出土の鉄釘である。断面方形で曲がっており、先部分である。

#### SB03出土遺物(8~13)

8・9は須恵器杯底部である。8は平底から緩やかに内湾する体部に伸びる。9も同様な形態でロクロナデである。10は土師器煮炊土器で長さ8cm、幅2cmの大きい内湾する把手部である。形状からは竈であろうが、体部の器壁が薄いことから不安である。薄さからは瓶かもしれない。把手部はユビオサエで仕上げる。内面はハケ整形である。砂粒を多く含む。11・12は製塙土器で、11は外傾し、12は直立ぎみである。端部は歪になりユビ成形で仕上げる、器壁厚い。13は棒状土錐で中央の幅が広いものである。最大幅1.2cm、残存長4.4cmで、片側端部を欠くが端部に近いと思われる。ユビ成形で歪になっている。黒斑が認められる。

#### SB04出土遺物(14)

棒状土錐で両端を欠いている。残存長2.7cm、径1.1cmを測る。

#### SB05出土土器(15~17)

15は須恵器杯で平底から外傾し端部反りぎみに丸い。ロクロナデで生焼けの製品である。底面は少し段を持ち体部との境は明瞭である。16は大きな角状の把手を有する土師器口縁部である。長さ5cmあり端部近くで上に反り細く丸くなっている。口径13.2cmと小さめであるが、被熱していることと内面に煤が付いていることから、甕や瓶と思われる。ユビ成形で把手部を付け、内面はナデで口縁部はヨコナデである。17は須恵器杯で内湾気味の体部で端部丸い。色調が淡く灰白を呈し、砂粒含む。

#### SB08出土土器(18)

須恵器杯で重ね焼きの痕跡残り、内面は自然釉が付着している。器壁厚めで、平底から明瞭な稜線を有さず内湾する体部になり、端部は丸い。

### ピット出土土器(19~22)

掘立柱建物・櫛に復元出来なかったピットからの出土である。19はSB02北辺の棟行中央柱穴北側のP36出土である。内湾する体部で端部丸い。20・21はSX04南側のP40出土である。20は製塙土器である。強く火を受けており、歪である。頭部状のくびれを持ち口縁部は直立からやや開き端部角張る。ユビ成形で、砂粒多く含む。21は須恵器杯底部である。平坦で稜線附近以外は未調整である。22はSB03・SB04空間内にあり柱列にならないP43出土である。稜線部がやや突出した平底の須恵器杯底部である。体部は内湾気味に延びる。

### SX04出土土器(23~34)

23~28は須恵器で23~26は杯である。23は平底から内湾する体部で端部尖る。体部高めで、ロクロナデ、内面見込み部は1方向の仕上げナデ、底部は未調整である。重ね焼きの痕跡が見られる。24は平底から内湾する体部になる。体部を意図的に割ったのではないかと思われる。25は内湾する体部で外面は自然釉が付いている。色調は白っぽい。26は生焼けで磨滅顯著。粘土組幅広で小石粒含む27は皿か大形の杯である。器表平滑で焼成良好である。平底から外傾する体部になる。稜線附近もロクロケズリと思われるがナデで調整している。転用観の可能性が残る。体部外面には火艶が見られる。28は高杯脚部である。外反し端部下方につまみ出。筒部の絞り目もナデ調整している。29~31は土師器壺である。29は明瞭な稜線を有さないくの字口縁で端部角張る。ヨコナデで強く被熱している。30は外反する口縁部で端部内外に肥厚する。端面は凝四線状に凹んでいる。黒斑が見られる。31はくの字口縁で内面には稜線がある。口縁部外傾し端部角張る。口縁部長めで長胴になると思われる。外面ハケ整形で砂粒多く含む。32~34は製塙土器で、すべてユビ成形で砂粒多く含み歪である。長石などの砂粒多く含んでいる。32は外傾し端部内側につまみ出している。33は外傾し端部丸い。34は外傾し端部薄いが角張る。磨滅顯著。

### SD17出土土器(35)

今回調査で実測可能な唯一の弥生土器である。SD17で図化したものは1点であるが、須恵器・土師器も出土しており、遺構の時期は奈良時代である。流入したものと思われる。頭部から大きく外反して口縁部になり、端部に向かってやや下がり端面を有し端部は内外に肥厚している。内側端部したは強いヨコナデにより凹んでいる。頭部には指頭圧痕で施文した貼付け突帯を巡らせている。赤色粒などの砂粒多く含んでいる。中期後半の広口壺である。

### 包含層出土土器(36~101)

36は古墳時代の須恵器杯身である。口縁部は外傾し端部丸く、立ち上がりは短く外傾し端部尖る。TK209である。

37~86は奈良時代の須恵器である。37~47は杯蓋であるが、破片で全体像が判るのは39だけである。38は低いボタン状のつまみが付く。つまみ中央が凹んでおり、天井部は平坦である。ロクロナデ。39は宝珠つまみを有する。ロクロナデで内面は不定方向のナデ調整である。端部は下方につまみ出している。40は天井部丸く、端部角張る。41は端部が丸くやや垂下する。42は端部下方へつまみ尖りぎみである。自然釉が付いている。43は端部近くで屈曲してから下へつまみ出している。44も屈曲してから下へつまみ出す口縁部で、天井部に稜線を持つ。重ね焼きの痕跡が見られる。45~46は口径大きめで、45は端部丸く46は天井部平坦で稜を持って外傾し端部垂下する。47は復元径26.2cmで器高の低い大形の蓋で、丸い天井部から丸く納める端部に続く。48~73は杯身で48~57は高台を持たない杯Aである。器高の差はあるが、平底から外傾もしくは内湾する体部で端部は丸いものが多いが、尖りぎみのものもある。底面はシャープである。48~50・51~54は重ね焼きの痕跡が見られる。50は生焼けである。58~67は杯Bである。高台は外に開くものと直立するものがあり、断面も台形と方形、端部が外に肥厚するものがある。59~60は高台低

く、58は外に開き高台高い。口縁部は外傾するものと内湾するものがあり、端部は丸いものが多い。68は口縁端部付近でS字状に屈曲する、口径小さく杯でなく椀などかもしれない。73は内側に肥厚している。74は皿である。底面はほとんど残存していないが平底で稜線は甘い。内湾気味で端部丸い。75・76は稜椀である。75は稜線から上の口縁部で外反し端部丸く仕上げる。76の方が丸みを持つ体部で口縁部直立気味に外反する。高台部は欠失している。77～82は壺である。77は外傾し端部肥厚し角張る。外面には6条以上の波状文が施されており、全体に磨滅しているが上下に突帯があったと思われる。78は内湾気味に外傾し内側に大きく肥厚している。79は短く外傾し端部内外に肥厚する。80は大形の口縁端部で端部突帯が剥離している。歪な破片であることから傾きなど明確でない。現況では内傾しているが、形態からは外傾する口縁の方が可能性が高いかもしれない。81は内湾する体部外面に波状文帯が3帯施されている。形状から体部としたが、整形からは口縁部かもしれない。82は体部で内面同心円文の當て具痕、外面タタキが施されている。83は丁寧に仕上げられた鉢口縁部で、外傾し端部細く仕上げている。ロクロナデのうちに内外面ともにミガキ状の仕上げが見られる。内面は白っぽい色調を呈している。84は壺底部で高台内面は内湾し外面外傾する高台部で端部内外に肥厚する。底部から体部は内湾しユビ仕上げである。85は鉢か壺の底部で不安定な平底で体部内湾する。86は高杯脚部で外反し端部下方へ曲げている。ロクロナデ。

87～92は土師器である。87はくの字の壺口縁部で端部角張り外側につまみ面を呈している。砂粒多く含んでいる。88は頸部内面の稜線鋭く、口縁部に被熱痕が残っている。頸部は強いヨコナデで肩部段になっている。外面は縦方向のハケ整形。89は時期の下る口縁部で短く外反し端部外側につまみ出す。内側端面は突帯状に肥厚している。体部がないが13世紀後半頃の壺であろう。90は杯蓋つまみである。頭頂部は宝珠状になっているが、下は円筒に近い。ユビ成形で黒斑が見られる。91・92は製塙土器口縁部である。ユビ成形で器壁厚く端部丸い。91は端部から体部にかけて塙化物が付いている。

93～96は中世須恵器である。93・94は椀底部で、94には糸切りが見られ、体部内湾する。95は壺口縁部で端部折り曲げている。96は捏鉢口縁部で外傾する端部から外反し端部上方に大きくつまみ上げる。端部肥厚し端面となる。強いロクロナデで器表に凹凸がある。

97は竜泉窯系青磁碗底部で外面には割花文が見られる。98は白磁碗底部で高台部は施釉されていない。共に削り出し高台である。

99～101は陶器で、99は備前焼壺底部破片で平底から外傾する体部になる。100は備前焼擂鉢底部である。6本以上1単位の攝り目である。内面は還元状態の色調を呈している。101は無釉陶器で平底から直立する体部に続く。体部の器壁が薄いことから大きく上に延びるか不明である。底面は糸切り。

S1はサヌカイト製石匙である。横長のものでつまみ部を欠いている。裏面は大きく割った状況でほぼ表面のみ加工している。一部自然面も残している。

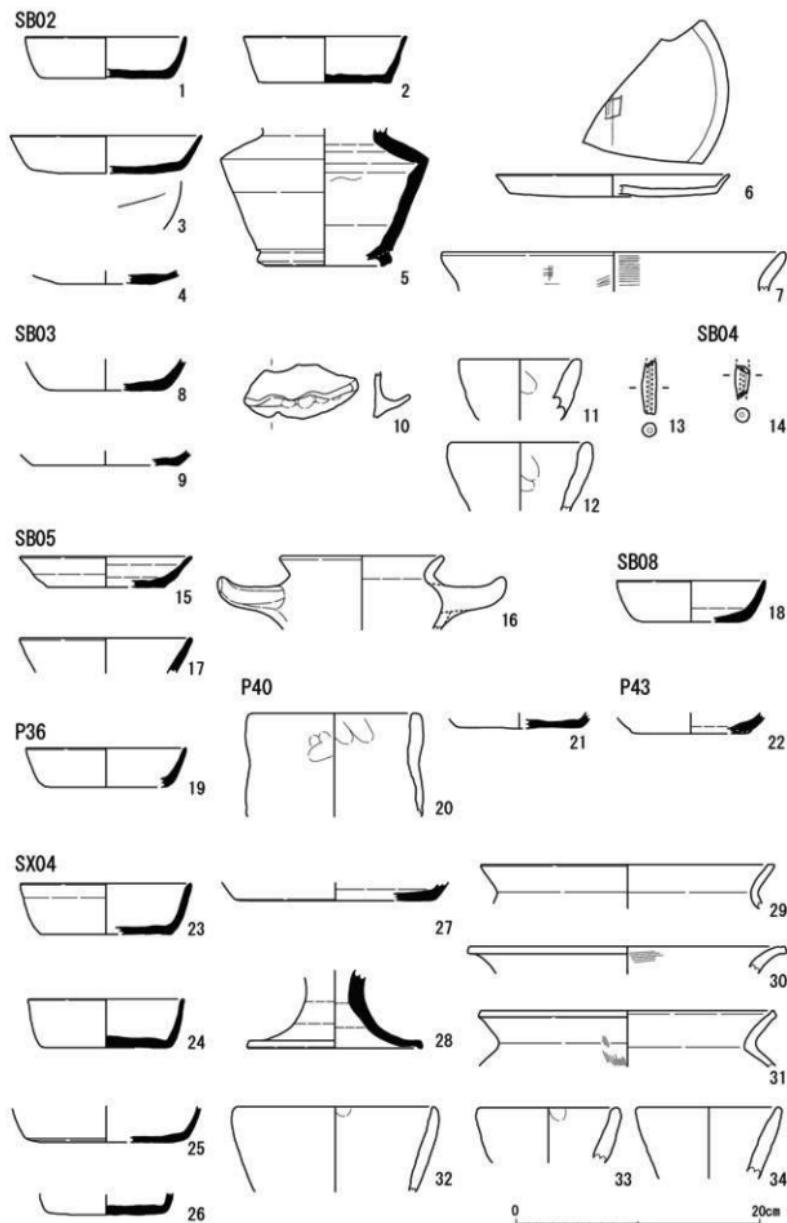


図 17 出土遺物実測図 (1)

SD17

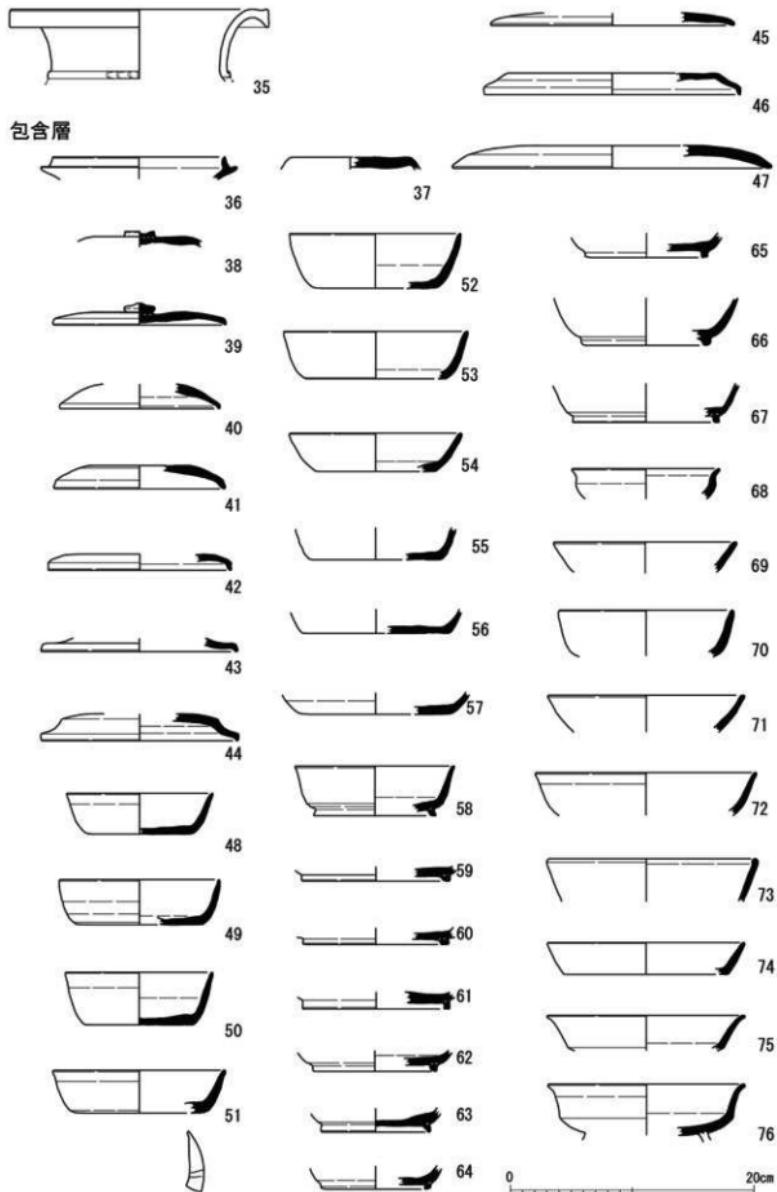


図 18 出土遺物実測図 (2)

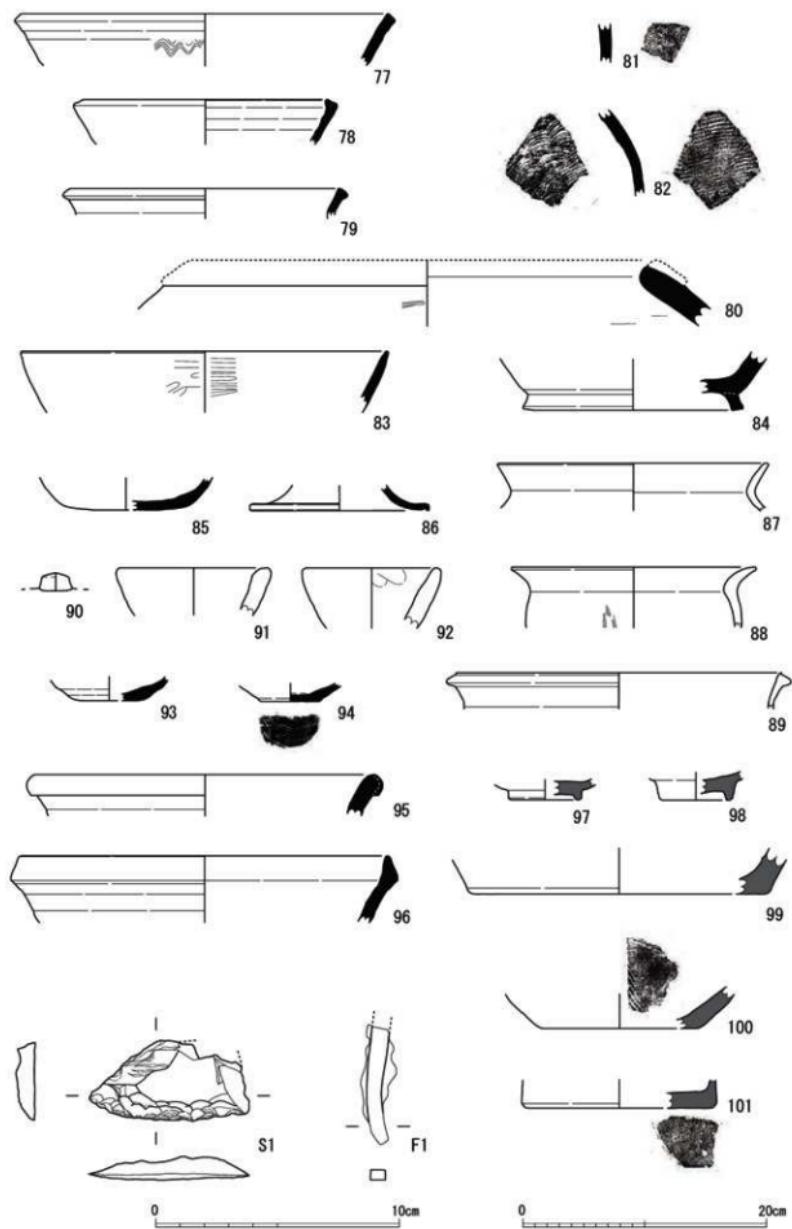


図 19 出土遺物実測図 (3)

出土遺物観察表

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	須恵器	杯	SB02 P44	(13.0)	3.4	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	須恵器	杯	SB02 P37	13.3	3.8	10.8	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	須恵器	杯	SB02 P44	(15.6)	3.1	(11.4)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
4	須恵器	杯	SB02 P51		残1.1	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	須恵器	壺	SB02 P1 SB05 P34		残11.4	9.4	ヘラケズリ	ロクロナデ	
6	土師器	皿	SB02 P53	(19.0)	1.8	17.2			
7	土師器	壺	SB02 P37	(28.0)	残3.2		ハケメ	ハケメ	
8	須恵器	杯	SB03 P11		残2.6	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	須恵器	杯	SB03 P10		残1.2	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	土師器	把手	SB03 P1		残3.7				
11	土師器	製塙土器	SB03 P11	(9.0)	残5.0			ユビオサエ	
12	土師器	製塙土器	SB03 P11	(11.0)	残5.7			ユビオサエ	
13	土製品	土鍤	SB03 P8	長さ残4.4巾1.2					
14	土製品	土鍤	SB04 P24	長さ残2.1巾1.15					
15	須恵器	杯	SB05 P6	(14.0)	2.5	(9.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	
16	土師器	壺	SB05 P48	(13.0)	残6.1				
17	須恵器	杯	SB05 P7	(14.0)	残2.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
18	須恵器	杯	SB08 P9	(12.0)	3.4	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
19	須恵器	杯	P36	(13.0)	3.2	(9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	
20	土師器	製塙土器	P40	(13.0)	残8.5		ユビオサエ	ユビオサエ	
21	須恵器	杯	P40		残1.3	(9.2)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
22	須恵器	杯	P43		残1.7	(9.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	
23	須恵器	杯	2区 SX04	(14.0)	4.15	(10.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	
24	須恵器	杯	2区 SX04	(12.6)	4.0	10.0	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
25	須恵器	杯	2区 SX04		残3.0	(12.4)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
26	須恵器	杯	2区 SX04		残1.75	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ・エヌナデ	
27	須恵器	杯	2区 SX04		残1.5	(15.8)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
28	須恵器	高杯	2区 SX04		残6.4	(14.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	
29	土師器	壺	2区 SX04	(24.0)	残3.6				
30	土師器	壺	2区 SX04	(25.8)	残2.2			ハケメ	
31	土師器	壺	2区 SX04	(24.0)	残4.6		ハケメ		
32	土師器	製塙土器	2区 SX04	(16.0)	残7.0			ユビオサエ	
33	土師器	製塙土器	2区 SX04	(11.0)	残4.5			ユビオサエ	
34	土師器	製塙土器	SX04	(11.4)	残5.9				
35	弥生土器	壺	SD17	(21.0)	残5.7				
36	須恵器	杯	1区南北部	(14.0)	残1.8		ロクロナデ	ロクロナデ	
37	須恵器	杯蓋	1区南北部		残1.0		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
38	須恵器	杯蓋	2区南半		残1.2		ロクロナデ	ロクロナデ	
39	須恵器	杯蓋	2区南半	(14.0)	残1.8		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
40	須恵器	杯蓋	2区 SX04上面	(13.0)	残2.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
41	須恵器	杯蓋	1区南北部		残1.9		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
42	須恵器	杯蓋	1区東西方向南半	(15.0)	残1.3		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	

番号	種別	器種	遺構	法量 (c m)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
43	須恵器	杯蓋	2区 SX04上面	(16.0)	残1.1		ロクロナデ	ロクロナデ	
44	須恵器	杯蓋	2区 南半	(16.0)	残2.2		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
45	須恵器	杯蓋	2区 南半	(20.0)	残1.0		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
46	須恵器	杯蓋	2区 南半	(21.0)	残1.75		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
47	須恵器	杯蓋	2区 南半	(26.0)	残1.9		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
48	須恵器	杯	2区 中央	(12.0)	3.35	(8.4)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
49	須恵器	杯	2区 南半	(13.0)	3.7	(10.4)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
50	須恵器	杯	2区 SX04上面	(12.0)	4.3	(8.6)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
51	須恵器	杯	1区南北部	(14.0)	3.5	(10.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ描きあり
52	須恵器	杯	1区東西部分	(14.0)	4.5	(9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	
53	須恵器	杯	2区 南半	(15.0)	3.9	(11.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	
54	須恵器	杯	1区南北部	(14.0)	3.15	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
55	須恵器	杯	2区 南半		残2.7	(10.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	
56	須恵器	杯	1区南北部		残2.0	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
57	須恵器	杯	2区 南半		残1.8	(12.0)	ロクロナデ・ヘラナデ	ロクロナデ	
58	須恵器	杯	2区 SX04上面	(13.0)	4.05	(10.0)			
59	須恵器	杯	2区		残1.2	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
60	須恵器	杯	1区南北部		残1.4	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
61	須恵器	杯	2区 北側		残1.4	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
62	須恵器	杯	1区東西方向南半		残1.7	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
63	須恵器	杯	1区南北部		残2.0	(9.0)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
64	須恵器	杯	1区南北部		残1.9	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
65	須恵器	杯	2区 南半		残2.0	(10.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
66	須恵器	杯	1区南北部		残3.9	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	
67	須恵器	杯	1区東西部分		残3.2	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
68	須恵器	椀	2区 北側	(12.0)	残2.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
69	須恵器	杯	1区南北部	(14.6)	残2.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
70	須恵器	杯	2区 北側	(14.2)	残3.8		ロクロナデ	ロクロナデ	
71	須恵器	杯	2区 南半	(16.0)	残3.0		ロクロナデ	ロクロナデ	
72	須恵器	杯	1区南北部	(18.0)	残3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
73	須恵器	杯	1区南北部	(18.0)	残3.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
74	須恵器	皿	1区南北部	(16.0)	2.6	(13.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	
75	須恵器	棱椀	2区 南半	(16.0)	残2.9		ロクロナデ	ロクロナデ	
76	須恵器	棱椀	2区 南半	(16.0)	残4.2		ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
77	須恵器	甕	2区 南半	(30.0)	残4.3		波状文	ロクロナデ	
78	須恵器	甕	1区東西部分	(20.0)	残3.7		ロクロナデ	ロクロナデ	
79	須恵器	甕	1区南北部	(22.0)	残2.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
80	須恵器	甕	2区 南半		残4.9			ロクロナデ	
81	須恵器	甕	1区東西部分		残3.2		波状文		
82	須恵器	甕	1区南北部		残7.1		タタキ	タタキ	
83	須恵器	鉢	1区南北部	(30.0)	残5.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
84	須恵器	壺	1区南北部		残4.8	(18.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
85	須恵器	鉢	1区南北部		残2.7	(11.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
86	須恵器	高杯	1区東西部分		残2.1	(14.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
87	土師器	甕	2区南半	(22.0)	残3.9				
88	土師器	甕	2区南半	(20.0)	残5.0		ハケメ		
89	土師器	甕	1区南北部	(26.6)	残3.0		ヨコナデ	ヨコナデ	
90	土師器	杯蓋	2区南半		残1.45				つまみ部のみ
91	土師器	製塩土器	2区 中央	(12.0)	残3.9				
92	土師器	製塩土器	2区南半	(10.4)	残5.0			ユビオサエ	
93	須恵器	楕	2区		残2.0	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	
94	須恵器	楕	2区 北側		残1.5	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
95	須恵器	甕	1区南北部	(28.0)	残3.4		ロクロナデ	ロクロナデ	
96	須恵器	鉢	2区	(30.0)	残5.5		ロクロナデ	ロクロナデ	
97	青磁	碗	1区南北部		残1.7	(5.6)			
98	白磁	碗	2区南半		残2.3	(5.8)			
99	備前焼	甕	1区東西方向南半		残2.4	(24.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
100	備前焼	擂鉢	2区南半		残3.4	(13.0)			
101	陶器		1区東西方向南半		残2.3	(15.2)			
S1	石製品	石匙	2区南半		残3.3				
F1	鉄製品	釘	P37	長さ残4.9 幅0.6×0.4					



### III 南田原条里遺跡第50次調査検出の柱根樹種について

今回の発掘調査において奈良時代の掘立柱建物址より5点の柱根が検出され、樹種同定を実施する機会を福崎町より得たので報告しておきたい。

同定試料は水漬けされている柱根より直接採取することとし、福崎町埋蔵文化財事務所にて作業を実施した。

試料は柱根より安全カミソリの刃を使用し、徒手で木口面、板目面、柾目面より切片を採取した。切片はアルコール、キシレンで下処理した後、松浪硝子工業株式会社製標本封入材M-Xで包埋し、プレパラートを作製、位相差顕微鏡下で同定を試みた。

柱根は出土資料であるところから、腐蝕が進み、明瞭な試料が採取されていないものがある。なお、プレパラートは福崎町教育委員会が保存している。

所 見(顕微鏡下での観察であり、写真に映されていない部分がある)

#### ・ SB03 P2

木口面には6年輪がみられ、晩材から早材への移行は急でその幅は広い。樹脂細胞は接線方向に点在している。上下に延びる放射組織間は3~17細胞幅である。板目面にみられる樹脂細胞の水平末端壁は平滑である。放射組織は単列、4~15細胞高がみられ、概ね4~6細胞高である。柾目面にみられる放射組織の分野壁孔は壁孔縁が円形状を呈し、孔口は幅が狭い典型的なヒノキ型で1分野に1~2個が確認される。

#### ・ SB03 P3

木口面には3年輪がみられ、晩材から早材への移行は急でその幅は広い。樹脂細胞は点在している。板目面にみられる放射組織は単列、1~7細胞高がみられるが、概ね3~4細胞高である。樹脂細胞の水平末端壁は平滑である。柾目面にみられる放射組織の分野壁孔は、壁孔縁がやや稍円形状を呈し孔口は壁孔縁に沿って幅の広いスギ型で、1分野に1個~2個が確認される。

#### ・ SB03 P11

木口面には5年輪がみられ、晩材から早材への移行は急でその幅は広い。樹脂細胞が点在している。放射組織間は4~12細胞幅である。板目面にみられる放射組織は、一部に2細胞幅の部分がみられるが基本的には単列で1~9細胞高がみられ、3~4細胞高が多い。樹脂細胞の水平末端壁は平滑である。柾目面にみられる放射組織の分野壁孔は壁孔縁が円形状を呈し、孔口は幅の狭い典型的なヒノキ型で、1分野に2~3個が確認される。

#### ・ SB04 P16

木口面には3年輪がみられ、晩材から早材への移行は急で幅は広い。樹脂細胞が点在している。放射組織間の幅は4~9細胞幅である。板目面にみられる放射組織は単列、3~13細胞高であり、9~10細胞高が多い。樹脂細胞にみられる水平末端壁は平滑である。柾目面にみられる放射組織の分野壁孔は壁孔縁が円形状を呈し、孔口は幅の狭い典型的なヒノキ型で、1分野に2個が確認される。

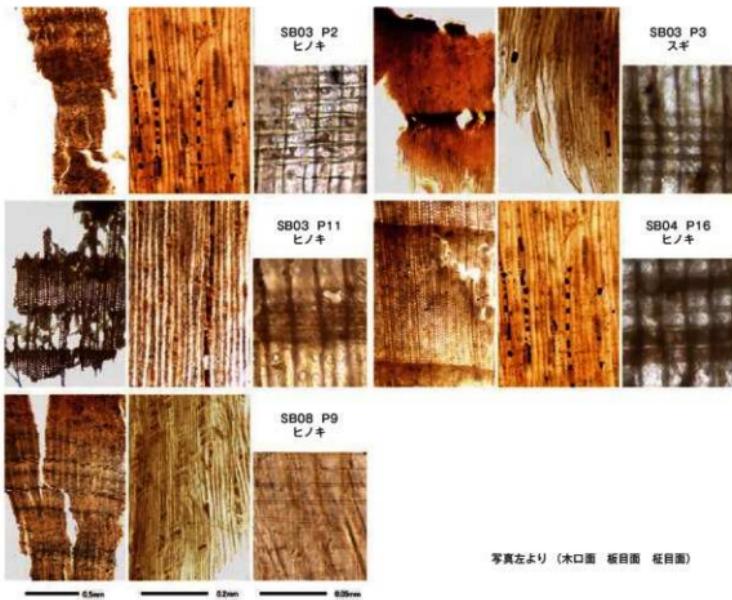
#### ・ SB08 P9

木口面には7年輪がみられ、晩材から早材への移行は急で、接線方向に樹脂細胞が点在している。板

目面にみられる放射組織は単列、3～15細胞高がある。樹脂細胞にみられる水平末端壁は平滑である。柵目面にみられる放射組織の分野壁孔は壁孔縁が円形状を呈し、孔口は分かりづらいが幅の狭いヒノキ型で、1分野に2個が存在している。

以上の所見から、SB03P3がスギ、他の4点はヒノキである。掘立柱建物址の柱としては一般的な用材であるといえよう。同定からはSB03の柱にヒノキ、スギが混在して利用されており、必ずしもヒノキにこだわった訳ではないようであるが、福崎町城の用材調査は皆無であり、今後の試料増加に期待したい。

(森下 大輔)



## IV. おわりに

今回南田原条里遺跡第50次調査の結果、奈良時代を中心とする遺構を検出した。確認した遺構は掘立柱建物10棟、柵5基、溝27本、落ち込み8基、土坑7基、ピットである。掘立柱建物のうちSB10は主軸方向がN45°Eと他と大きく方位を変えており、洪水堆積層の上に築かれていること、柱穴の径が小さく柱間が広いことから時期が異なる建物である。柱穴から出土した遺物はないが、包含層出土土器の中に中世の遺物が認められることから鎌倉時代頃の建物と思われる。それ以外の9棟が奈良時代の建物である。主軸方向は大きく2つに分かれる。SB02がほぼ南北を向き、他の8棟は10°前後東に振っている。柵もSA01とSA02がSB02と同じ南北で、他の3基は12°東に振っている。大きさは2時期に分けられ、正方位のものが古く、12°東に変えているものが妥当であろうが、大きな差はないと考えている。その根拠はSB02P1出土の長頸壺(実測Na5)がSB05P34出土の破片と接合したことによる。ともに柱穴からの出土で、SB02廃棄(柱は切られるか抜き取られ、柱穴内に礫が入れられていることから)とSB05構築が同じではないかと思われる。となると親縁性の高い2棟と考えられ、時期差はあるが継続していたと思われる。新しいグループの中でSB08とSB09の2棟だけ僅か(2°)であるが主軸方位を変えており、細かい時期差があるのかもしれない。また、南側でも主軸方向は同じであるが、SB03とSB04は切り合い関係があり、時期差があることが確実である。SB04の方が古いと思われる。大きく3期に分けることが可能で、古段階SB02、中段階SB04-08-09、新段階SB01-03-05-06-07となる。東西棟SB08と南北棟SB09は北辺を揃えており、東西棟SB03北辺と南北棟SB05南辺を通し、東西棟SB03と南北棟SB01の北辺を揃え、南北棟SB05西辺と東西棟SB07東辺が通っている。

次に掘立柱建物の柱穴であるが、SB02を典型例として棟行中央の柱穴が小さい特徴がある。SB02の東西辺は最大長0.95mと掘り方が大きく石材を伴っている。深さも0.45mあり、柱痕跡も0.25mを測る。南北辺中央の柱穴は径0.35m、深さ0.25mと規模が小さく石材を伴っていない。同様の傾向が南側の建物に共通している。北側の東西棟であるSB07-08は総柱建物でそれ以外の側柱建物とは異なっている。地形が高い部分で遺構の残存状況が悪く、上部を一部削平されていると思われる。特別大きな柱穴ではないが、総柱建物であることは特記される。

建物の広がりは3期に分けた新段階で東西35m、南北43m以上になる。今回の調査では建物群を画する直線的な溝が検出されていないが、45m以上の広がりは確認される。第40次調査と比較(図20)してみると、主軸方位は同じものの位置的に直線に並ぶとは言い難い。第40次調査では溝が検出されており、1辺48m前後に復元される。同規模のまとまりがあったのであろうか。荘所などのまとまり単位があり、第50次中央施設東辺と第40次中央施設西辺が直線になっている可能性がある。

出土遺物から大半の遺構は平城IIを主とする古相を示すものと思われる。出土遺物の中には稜楕や製塙土器が認められる点は第40次と同様である。今回は墨書き土器や硯などさらに有力な資料は出土しなかったものの官衙的性格は掘立柱建物からさらに増幅したと思われる。今回出土した製塙土器には第40次調査では認められなかった内面に布目が見られるものも含まれており、小規模ながら集落が継続されており、中世へと引き継がれている。



図20 南田原条里遺跡第40次・第50次調査平面図

報告書抄録

ふりがな	みなみたわらじょうりいせき (だい 50 じ)
書名	南田原条里遺跡（第50次）
副書名	コーブこうべ倉庫建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	25
編著者名	渡辺 昇・森下大輔
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1 TEL: 0790-22-0560
発行年月日	2022年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	要因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
みなみたわらじょうり 南田原条里 遺跡（第50次）	かんざきぐんふくさきちょう 神崎郡福崎町 みなみたわら 南田原 あさ 字ナコザ 3043番ほか	28443	410046	34 度 56 分 52 秒	134 度 45 分 30 秒	2022年 11月8日 ～12月22日 (実働24日間)	1270	倉庫 建設 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南田原条里 遺跡（第50次）	集落	奈良	掘立柱建物 落ち込み、土坑 溝	土師器 須恵器 製塙土器	

# 写 真 図 版





調査準備（草刈り）



調査前（北西から）



調査前（北から）



機械掘削



1区南北部分（北から）



1区南北部分（南から）



1区南北部分北壁



1区南北部分 SK01（南から）



SK02（西から）



SK03（西から）



SD01（南から）



調査風景



1区南北部分東壁



調査風景



1区東西部分須恵器出土状態



1区東西部分北壁



SD02 (北から)



SD02 (南から)



SD02 断面 (南から)



SD03 (南から)



SD03 アゼ (南から)



SD03 北壁断面



SK04 (南から)



SK05 (南から)

図版 4



SK06 (南から)



SK06 アゼ (南から)



SX01 (南から)



風倒木 (南から)



SX02 アゼ (南から)



SX02 (南から)



1区東西部分全景 (東から)



1区東西部分全景 (西から)



1区東西部分西半（南から）



SB01（南から）



1区垂直写真



1区西半垂直写真



1区東半垂直写真

図版 6



南上空から



西上空から



北上空から



東上空から



2区南半西壁



2区南半西壁



2区南壁



2区南壁



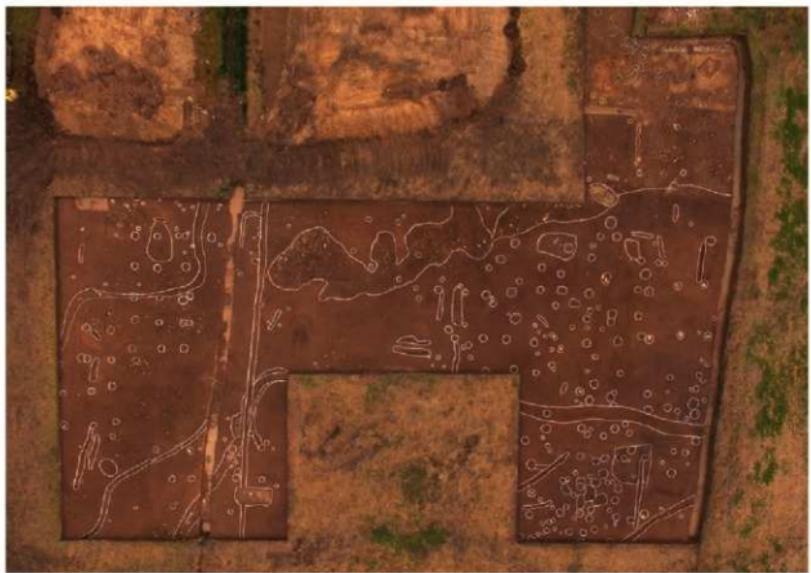
2区全景（南から）



2区全景（北から）



2区全景（南から）



2区垂直写真



2区南半垂直写真



SB02 (南から)



SB02 (西から)



SB02 (北から)



SB02P1 底 (東から)



SB02P2 断割り (東から)



SB02P2 底 (東から)



SB02P3 断割り (西から)



SB02P24 断割り (西から)



SB02P44 断割り（東から）



SB02P44 調査風景（東から）



SB02P44 断割り（東から）



SB02P44 底（東から）



SB02P50 断割り（東から）



SB02P51 断割り（西から）



SB02P52 断割り（南から）



SB02P53 土器出土状態（南から）



SB03-04 全景（南から）



SB03P1 断割り（南から）



SB03P2 断割り（南から）



SB03P3 断割り（南から）



SB03P4 断割り（南から）



SB03P5 断割り（南から）



SB03P6 断割り（東から）



SB03P7（北から）



SB03P8（北から）



SB03P10（北から）



SB03P11（北から）



SB03P11 底（北から）



SB03P12 断割り（北から）



SB04P1 断割り（南から）



SB04P2 断割り（南から）



SB04P3 断割り（南から）



SB04P4 断割り（南から）



SB04P8 断割り（北から）



SB04P10 断割り（北から）



SB04P11 断割り（北から）



SB04P12 断割り（北から）



SB04P13 断割り（北から）



P16 断割り（東から）



SB05（東から）



SB05（南から）



SB05P7 断割り（東から）



SB05P34 調査風景



SB05P5 断割り（西から）



SB05P6 断割り（南から）



SB05P34 土器出土状態（北から）



SB05P34 断割り（東から）



SB05P42 断割り（東から）



SB05P48 断割り（東から）



SB05P48 土器出土状態（南から）



SB05・10（南西から）



SD05 アゼ（南から）



SD05 アゼ（南から）



SD06 アゼ（東から）



SD07 断面（北壁）



SD07（南から）



SB03-SD07（南から）



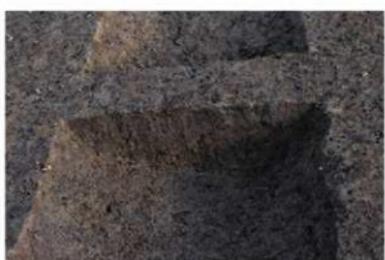
SD08 西壁



SD08 南壁



SD09 アゼ（西から）



SD09 アゼ（西から）



SD10 北壁



SD12 西壁



SD09・12・13（東から）



SD14・15 アゼ（南から）



SD14 アゼ（南から）



SD15 アゼ（南から）



SD14・15（北から）



SD14・15 調査風景



旧河道・SB10（北から）



噴砂（南から）



SX03 アゼ（南から）



SX03 アゼ（南から）



SX04（南から）



SX04（北から）



SX04（西から）



SX04 調査風景



SX04 土器出土状態



SX04 断面（南から）



2 区中央西壁



調査風景



2 区北側（西から）



2区北側（東から）



2区北側（北西から）



2区北側西壁



2区北側西壁



2区北側南壁



2区北側南壁



SD16 西壁



SD16 西アゼ（東から）



SD17 調査風景



SD16 東壁



SD16 (西から)



SD17 (北西から)



SD17 断面 (南から)



SD17 西壁



SD17 土器出土状態 (北から)



SD17 土器出土状態 (西から)



SD18 アゼ（北から）



SD18（北西から）



SD17～21（北東から）



SD17・19 調査風景



SD19 アゼ（北西から）



SD19 アゼ（北西から）



SD20・21 アゼ（東から）



SD20 アゼ（東から）



SD21 アゼ（東から）



SD20・21（西から）



SB08・SD22（北から）



SD22 アゼ（西から）



SD22（北西から）



SX06 断面（南西から）



SX05 断面（南から）



SX05（南から）



SB06 (東から)



SB06 (南から)



SB06 (北から)



SB06P1 (北から)



SB06P2 (北から)



調査風景



SB07 (西から)



SB07 (南から)



SB07P1 断割り（西から）



SB07P2 断割り（西から）



SB07P3 断割り（西から）



SB07P4 断割り（南から）



SB07P8 断割り（南から）



SB07P30 断割り（南から）



SB08・09（北から）



SB08・09（東から）



SB08P1 断割り（北から）



SB08P3 断割り（南から）



SB08P4 断割り（南から）



SB08P11 断割り（南から）



SB08P12 断割り（南から）



SB09P29 断面（西から）



P8 断面（東から）



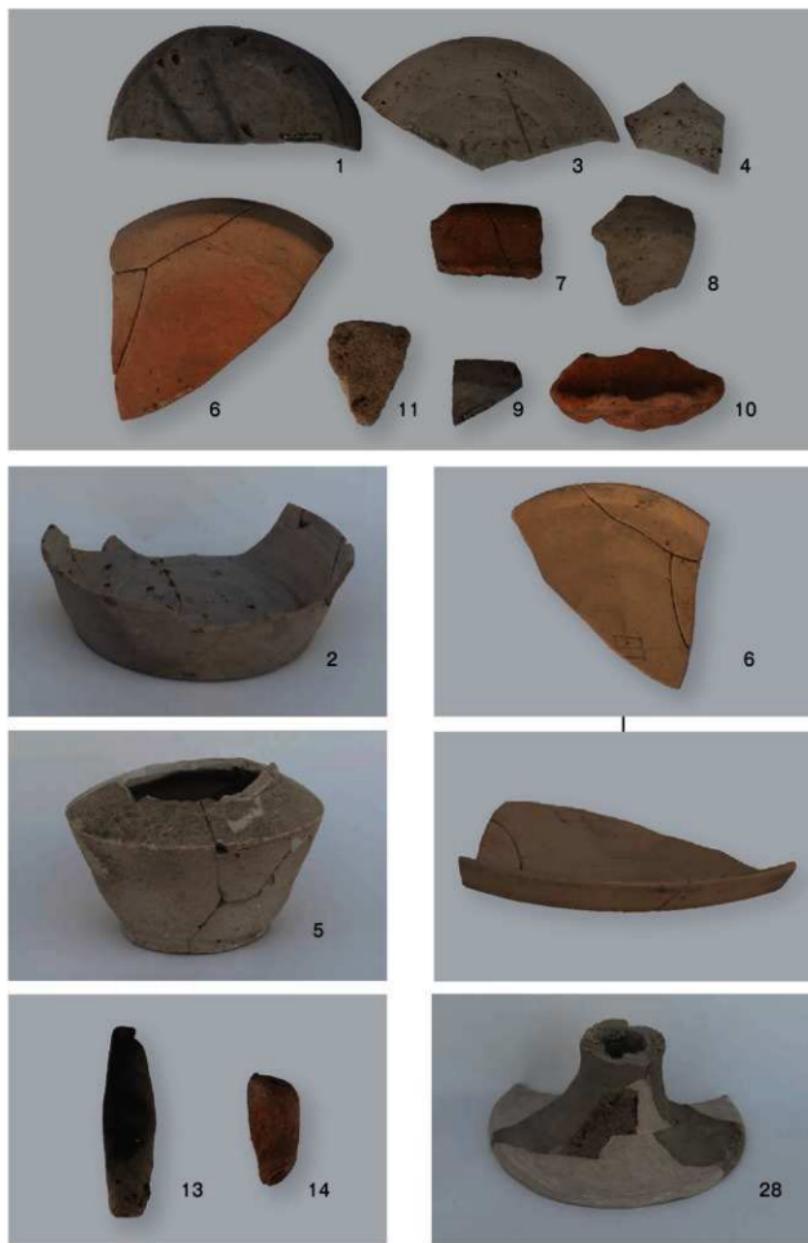
P45 断面（東から）



2区全景（南から）



2区全景（北から）













2022年3月31日発行

福崎町埋蔵文化財調査報告25

## 南田原条里遺跡第50次

—コープこうべ倉庫建設に伴う発掘調査報告書—

編集発行 福崎町教育委員会

〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1

印 刷 作本印刷